関東大震災体験記

この体験記は、秦野地方にも大きな被害をもたらした関東大震災の貴重な体験談を記録として後世に伝え、さらには、各地区でどのような災害が発生したかを知っていただき、日頃の備えの参考にしていただくことを目的に、昭和５７年に発刊したものをＷＥＢ版として公開するものです。

現代の生活環境は、震災当時と比べ、大きく変化していますが、体験は実感をもって、生々しく私達に地震対策のあり方を教えてくれます。

地震の発生を防ぐことはできませんが、日頃から備えをすることにより、被害を最小限に止めることは可能です。市民の皆さんが、この体験記をひとつのヒントにして、地震対策に目を向けていただきたいと思います。

なお、収録した体験談の記述内容について、執筆者の了解を得たうえで、文意を損わない範囲での整理、省略を行っています。

編　集：秦野市環境農政部防災課

目　　次

体験談　悲しみ苦しみ恐ろしさの記憶

（本町地区）

人が地面から五十センチも	栄　町	普　川　健　蔵	1
恐怖にとまどう私	幸　町	川　口　正　子	1
食器戸棚が私の上に	曽　屋	原　　ヒロ子	3
私の倒れている目の前に家が倒れかかり	ひばりヶ丘	栗　原　巳代治	3
隣の主人は梁の下敷きに	水神町	桐　山　政　之	5
父は梁の下で圧死	入船町	高　橋　　眞	6

（南　地区）

五間梁が姉弟三人の上に	平　沢	和　田　ソ　デ	7
弟は土壁が崩れて	上今川町	川　口　喜　助	8
畑のトウモロコシで飢をしのいで秦野へ	平　沢	草　山　権　平	9
子を亡くした母の声と半鐘の音	尾　尻	竹　原　栄　三	10

（東　地区）

我が子の名前を呼びながら	名古木	大　木　チ　ヨ	12
倒れた腹の下で地面がパックリ口をあけて	名古木	小　泉　作　造	12
地すべりで児童二人が生きうめ	名古木	井　上　千代吉	14

（大根地区）

天災に対する私の信念	北矢名	小　林　な　み	15
樹木は生命あるかのように身をよじらせ	北矢名	平　井　善　造	16

（鶴巻地区）

家の下敷になった息子夫婦を置いて	鶴　巻	小　川　俊　子	17
突然ドーンという地鳴が	鶴　巻	山　田　竹　雄	18

（西　地区）

庭に地割がバックリ	堀　西	山　口　キ　ミ	19
地面をゴロゴロ	渋　沢	小　室　サイ子	20
グラッときたその瞬間	堀　西	岩　田　与　一	21
つぶれた家の中で火の始末	柳　町	土　屋　文　蔵	22

（上　地区）

子供を抱えて竹やぶに	柳　川	守　屋　イ　チ	22

<u>被害の記憶</u>

（本町地区）

火事は秦野町内を焼きつくす	幸　町	石　田　寿　子	24
消火作業の間に我が家が灰に	栄　町	山　村　徳　次	25
水道は寸断空は赤く焼トタンが舞う	入船町	高　橋　仙太郎	26
目の前の橋が波を打って崩れおちた	本　町	青　木　吉　長	27
空は土煙で灰かぐらのごとく	河原町	五十嵐　米　廣	28
焼けトタンが空を舞う	栄　町	普　川　富美子	30

（南　地区）

地震で湖が誕生	今　泉	栗　原　友　次	31
池の水が八尺もはねあがり	大秦町	高　橋　義　三	32
被害は地盤によって	西大竹	高　橋　俊　治	34

（東　地区）

日常の備え	名古木	重　原　康　夫	35
平らな畑が二メートル以上の凹凸に	名古木	小　泉　武　男	36
柿の木の枝が地につく程の大揺れ	西田原	牧　嶋　芳　男	37
空は日食のように暗かった	名古木	小　泉　耕　三	38
山が崩れる様な音が	西田原	窪　島　貞　次	39

（大根地区）

南矢名は全壊半壊が多数あった	南矢名	鈴木角蔵・小沢ヨシ	40

（鶴巻地区）

何かが光った、そして畑が	鶴　巻	臼　井　四　郎	41

（西　地区）

岩の上にある家は大丈夫だった	松原町	岩　本　善　江	42
四ツ角に酒ダルで給水	並木町	久保寺　と　め	43
近くの山が赤裸に	沼代新町	大　森　修　蔵	44
山津波でドロの海	千　村	原　　峯　治	45
収穫した作物も一瞬のうちに灰に	千　村	奥　津　カ　ネ	46

（上　地区）

北西方向より轟音が	柳　川	守　屋　芳　三	46

関東大震災（大正十二年九月一日）旧町村別被害状況　49

人が地面から五十センチも

（栄　町）　普　川　健　蔵

関東大震災の時の私の体験では、“ゴー・ドスン”と音がして、上・下運動が五・六分間位と思います。以後十分位横振りでした。その短時間の出来事は、何も考えられず、闇の中で起った様でした。人が地面より四・五十センチ上・下運動していました。静かになって周囲を見回すと、どの家も半壊や全壊が目立ち、全体の四割位が被害を受けていました。電気、水道、電話、交通、全部不通、消防は、電柱や電線が倒れたり、たれ下がったり、地割れ等により全々使用出来ません。

私の住んでいた平塚で、火災が四ヶ所有りましたが、家族で火を消した為、大事に至らずにすみました。

道路は、一部復旧が一ヶ月位かかり、全通は半年から一ヶ年位、通信も同じ位の期間がついやされました。

大正十三年一月十五日も、建前したばかりの家の土台が、五寸位動く大きな地震がありました。

其の後大正十五年十二月に、丹後の大地震に合いました。時期はずれの大雪で、三メートル位もつもり、地震の最中は屋根瓦がばたばた落ちて危険でした。

家庭に備えておくべきもの、毛布一枚、ナンキン袋、懐中電灯、マッチ、ローソク一個づつ、砂袋（五キロ入り三袋以上）、食料は十日分位、白米又は玄米、かつぶし、ミソ、正油、砂糖、塩、梅干、カンパン、カン詰類、マキ等です。

恐怖にとまどう私

（幸　町）　川　口　正　子

その時、私は八王子市に在住しており、小学校五年生でした。八王子市は、人口四万三千位だったと記憶しております。

大正十二年九月一日は、昨夜来の雨が晴れて、昼頃には真夏同様の暑さとなりました。琴を習っていたので、お師匠さんの家で箏曲「桜狩」をひいていました。何の前触れもなく、突然、家が激しく揺れ出して、立ちあがろうとしましたが、どうにも立てず、お師匠さんも私も、側でお稽古を待っていた友達も、ともに琴にしがみついて、あまりの恐しさに顔を伏せたまま声も出ませんでした。隣室にいたお師匠さんのお母様も這って来て倒れてしまい、同時に、襖が何枚もバタバタと倒れましたが、幸い怪

我はありませんでした。第一震がやんで庭へ出たら、空は灰色で木の葉やゴミが一杯舞っていました。第二震、第三震と、僅かな間隔で激震が来るので、私達は、みんな庭の木にかじりついていましたが、今思えば震度六位であったでしょうか。

自分の家が心配で帰りかけた時、私は、まだ琴爪を三本の指にはめたままである事に気付きました。私の家は、五百メートル位離れていました。大通りに出たら、土蔵の多い町でしたが、それが、みんな壁土を振い落されて、土煙りが濛々とたって、眼も開けられない位でした。一人の大きな男の人が、「火を消せ火を消せ」と、大声でどなって歩いていたのを記憶しています。木造住宅は、ほとんど建っていましたが、四階建ての煉瓦造りの商工会議所が崩れて、大きな煉瓦の固まりが隣家に落ちて、トタン屋根を貫き、主婦が片足切断の大きな被害を受けました。私が家に着いて間もなく、六人即死の報を聞きました。土蔵と土蔵との間の狭い通路で、洗濯をしていた人が、土蔵の崩れで生き埋め、或は、小学生が、倒れてきた石塀で即死等がありました。

八王子は、市の日があって、その日は、露店商人が沢山でるので、その人たちの為に、テントが道路の真中に張ってあったので、老人、子供はその中に避難して、夜を明しました。夕方になったら、各家庭から奉仕員が出て、道路で炊き出しをして、おむすびが配られました。でも、こんな時は、誰でも空腹は、あまり感じないものです。

男はゲートルに足袋、女はモンペや簡単服で、草履をはいたまま、玄関や店先に、ごろ寝をしました。停電で真暗な所に、東京や横浜の空だけが真赤に見えて、火災の物凄さがわかり、たびたび来る余震に、全く無気味な一夜でした。

甲州街道沿いの私の家の前は、夜も昼も、罹災者が乞食同然の姿で、縁故を頼って歩いていましたが、雨の日はずぶぬれで、誠に気の毒な感じがしました。日の経つにつれて、大都会の親類や知人の悲しい罹災がわかり、そのたびに、小さな胸を痛めました。余震は、尚、毎日来るので、老人や子供は、市外へ行く様にとの事なので、私は友達の郊外の別荘に、暫くあずけられました。この別荘に来て、半月ぶりに、はじめて風呂に入り、洗濯もして、こざっぱりしたものが着られました。停電は、一ヶ月も続き蝋燭も売り切れて無いので、夜は、日暮れと同時に寝ました。こんな生活でしたが、次第に落ち着きを取り戻し、「かくれんぼ」等をして遊んだのを覚えています。

東京との汽車の開通は、約半月後、一日数本、学校の授業再開は、一ヶ月後、二階の校舎は傾いたので、平家の校舎のみで二部授業を三ヶ月位続けました。

八王子は、火事を出さなかったことが何よりでした。

尚、今で言う自治会の活動が盛んで、お互いに有る物を出し合って、ひもじい思いや寒い思いを、私達は経験しませんでした。毎夜、交代で、夜警を厳重にして、災害を利用した犯罪も少なかったので、まずまず結構だったと思います。

食器戸棚が私の上に

（曽　屋）　原　　ヒロ子

大正十二年九月一日、当時三歳半位だった私は、茶の間の食器戸棚の前でお昼を食べていました。一日、十五日、二十八日には必ず小豆飯を炊いて、神仏に供えていた我が家でしたが、この日は何故かぼたもちでした。父が大変甘い物が好きでしたので、朝沢山作っておいて、お昼に食べるつもりだったのです。私はそれを皆より先に食べていました。そこへあの大地震でした。泣いている私の上にそばにあった食器棚が倒れてきて、私はその下敷きになってしまいました。どのくらい時間がたったのか私は父の腕に抱かれていました。舟のように揺れる我が家は、襖や、障子が全部はずれて、大掃除の時のようでした。幸い私は手にちょっとかすり傷を作った程度ですみました。

私たちは北原へ逃げて行ったようです。今の北原堂さんのあるあたりに、むしろを敷いて近所の人達と、おおぜいですわっていました。四ッ角の方が真赤に燃えていましたが、その火は下曽屋の小峯神社の手前で消えたそうです。霊験あらたかだと言うので、それから八月三十一日には、お祭りをするようになったそうです。幼い私がどこで聞いたか「あそこでお米を売ってくれるんだってよ。お母さん買いに行こうよ。」などと言って大人を泣かせました。その夜から我が家では、戸板の上にふとんを敷いて寝ました。蚊帳の中から月を眺めながら寝たことをぼんやり覚えています。その年はほとんど一ヶ月ぐらい雨が降らなかったので助かりました。

とにかく私が家に入るのを恐がって泣くので、外で寝かしてから家に入ったそうです。そんな私ですが地震に備えて、何か用意をしているかと言えば、四十九年に新築した家をプレハブにした位のものです。見えない天井裏に鉄骨が使ってあるのが気に入りました。家の周囲は、生垣にしましたので地震のときなどとても安全だと思います。食糧の備えも大切だと思います。常に非常分として二～三日分の食糧は備えておく必要があると思います。

とにかく天災は自らむかえうつという気持が大切であると思います。

私の倒れている目の前に家が倒れかかり

（ひばりヶ丘）　栗　原　巳代治

九月一日と言うと今でも思い出すあの恐ろしかった大地震だ。私は、当時小学生時代にて、余り細かい点について関心はなく大層年月も経っているから、記憶もないけ

れど、薄らいて居る記憶を思い起こして見る事にした。

九月一日は、朝から雨が降っていた。小学校は暑中休み明けの登校日、十一時頃からか雨は止み、薄暗い曇り天日で蒸し暑かった。学校は、登校日だったので、十一時頃終わって、それぞれ帰宅の途中だったかとも思う、自分は、たしか掃除当番が終わり、家が学校に近かったので帰宅し、昼食が終わった直後の出来事だった。“ 地震だ ”と思った途端に大地震になった。始めのうちは、震度四位だったかと思うが、その途端上下動となり、座ってさえもいられない始末でどうすることさえも出来ず、手当り次第の物につかまっている始末だった。自分は無心に家外に出た様なものの、続いて来る大地震でどうすることも出来ず、只、地面に伏しているだけだった。自分が倒れている目の前では、家がだんだん倒れて来るのが見えているに係らず、逃げることさえ出来ない始末だった。幸いにして潰れないで済んだから、いままで生きていることが出来たものの、もし潰れていたら、当然、下敷となって命はなかったと思う。多くの人達は皆、自分の様な状態で命を失い、又は、負傷したことであっただろう。そんな時間は、相当続いて居た訳だが、少し静かになるや、今度は、火事のさわぎだった。火元は、我が家より三百メートル位しか、離れておらず、農家だったので煙りは、一面空を覆って燃え、無気味な音もすさまじく聞こえた。それは、生地獄と表現してよいことだろうと思う。“ 火事だ火事だ ”と言っているが、水はなく、又誰ひとりとして火事現場に駆けつける人もなかった様だった。たまたま風は、反対方向に吹いていたからよかったものの、でなければ、私達は本当に、無一文となった事でしょう。火事は、水がなく何遠慮なく、燃え続けて三日間位燃えていたと思う。したがって四ツ角を中心として四面、町の中心部分を焼失してしまったわけである。

夕方になり一様に平静を取りもどし、食物・水の心配が出て来た。私達の住いの一角は、共同炊事をすることにしたが、米の心配やら水の心配をしなければならなかった。水は近所の何処にもなく、唯一箇所だけ四ツ角に水が出ると言うことで、男は水汲み役と言ったところだった。その晩は、一・二個のむすびの配給で一夜を余震におびえ、夜空に映る火を眺めながら一夜を明かしたのであった。

朝になり昨夜汲んで来た水を見たら、バケツの底に薄く土がよどんでいた。昨夜は、みんなが、この水を飲んでいたんだなあーと、顔を見合わせる始末だった。

次にまた恐ろしい問題が出現した、余震は強く時には弱く常によっており、四・五日後朝から雨は静かに降っていた。

次に苦しんだ思い出としては、当時の小学校は二学期より一部の教科書を購入しなければならなかったが、秦野の榎本・金増二書店が、丸焼けの為、秦野では購入できませんでした。たまたま伊勢原に行けばあると言うことでしたので同窓の二人で買い

に行ったが、電車はなく、バスもなく、徒歩で行きました。地震の為、道は洗濯板と言うより亀の甲らを、ばらばらにした様な、地割れの状態で、十センチ位から五十センチ位割れており凹凸は二・三十センチ位あって、なかなか大変でした。ようやく伊勢原に着き、書店を尋ねたところ、「ない」との事で、平塚に向ったが、伊勢原・平塚街道も同じ様な状態でした。やっとたどり着いた平塚にもなく、大磯で、一部、二宮で、一部をようやく買い求める事ができた。子供にして、あの様な悪い道を、伊勢原から平塚を経て、二宮より秦野に帰って来たと言う事は、今、自分ながら信じかねるしだいです。その夜は相当遅く帰宅した事を記憶している。

現在では、防災訓練など国を中心して県や市、各自治会によって対応策を立てていられるけれど、いざ、直面すると、なかなかうまく行かない事と思うので、各家庭、各個人の心構えが、必要だと思います。食糧用品のこと、水のこと、薬品類など、最小限度の身の回り品は、お互い、常に備えて置くことが必要でしょう。平常時は店頭に何でもあるが、一度、事件が起きると、人心一変し、売り惜しみなどがあって、正常では手に入り難くなる事はお互い、近時においてさえ体験している事で良く知っていると思う。もし地震が、起きれば想像以上になる事でしょう。

地震対策については市や自治会の良き指示に従い、行動して行きたいものと考えております。

隣の主人は梁の下敷きに

（水神町）　桐　山　政　之

秦野市寺山角谷戸一六五〇番地、十五才当時の記憶を述べます。

私の家は七人家族で、地震発生時刻には炊事が終り、食卓を囲み全員で昼食をとっておりました。グラグラドシン大きな音とともに、家はガタガタミシミシと長く揺れ、煤や壁が落ち、蒙蒙たる土煙で一寸先も見えず、逃げるどころか這うことも出来ない状態でありました。

地震が止んだ時、全員裏の地干場（煙草を地面に広げ乾燥する所）に逃げました。大山連峰や畑の土手は、ガケ崩れのため、緑の山波は一変して赤肌の姿と化し、ただ茫然としてあたりを見まわすばかりでした。余震は間断なく揺れていました。しばらくして、表の庭に出て我家を見ると、板倉土蔵は壁が全部落ち、無残な姿と変り初めて地震の恐さを知りました。住宅は茅葺屋根で間口八間、奥行五間の住宅も土台が全部三寸程前に移動し、壁は全部落ち、まるで家と呼ぶことの出来ないような形になっ

てしまいました。馬も小屋から外に繋がれ、何か語りたい表情のようでした。

二時間程過ぎて、隣の住宅の屋根が見えないので行ってみると、悲鳴が聞えていました。懸命の救助で大人三人、小児一人は無事救出されましたが、不幸にも主人は梁の下敷になり即死されました。十日市場（現在の本町）は、火災が発生し、黒煙は空高く上っていくのが見えました。夜になると、紅煙は空を焦し、飛火の音が遠く間断なく聞えていました。大火のため、十日市場に親戚のある人も、自宅の破壊と余震の恐怖のため、誰も救援に駆けつける者はありませんでした。

地震発生後の生活状況ですが、農家は皆庭が広いので、各家庭共通の中心地に避難して居りました。食料品の主食は、多量の貯蔵がありましたので、不自由はありませんでした。

父は梁の下で圧死

（入船町）　高　橋　　眞

大正十二年九月一日の朝は、ものすごい吹き降りだった。父は、激しい雨のため、母に高下駄を出すように言ったが、引き出しにつかえてすぐには出なかった。出がけの事で、不満の顔で大道通りの煙草元売捌所に向かった。父の怒った姿を見たが、これが今生の別れとなってしまった。

当時、湘南軌道が、台町停車場より御門蔵の前を通過して、専売局の構内に引込線を作る計画があり、現在の秦野電報電話局の所へ停車場を設置するため、該当地権者と交渉が持たれており、遂に土地収用法により、拙宅も余儀なく、現在地に引き家をして十一日目だった。たまたま土盛り工事をした東道の上田某が、費用を受領に来たので、父から預っていた賃金を手交した直後の十一時五十八分、ドスンと同時にグラグラと家屋が大揺れし､棚から物が落下し､ガラス戸が割れる程の大地震が発生した。夏の事ゆえ、すぐ戸外に飛び出して、ころがるように前庭の糸ひばにつかまり、裏を見ると、莫大な費用を掛けて、引いて来た土蔵は土煙りを上げて倒壊した。母は、お勝手で天ぷら揚げの準備中、油を入れた直後の事で「火事を出しては大変」と油が入った七輪を空地にほうり出した。油は腕から着物にかかったが、油が煮たってなかったので幸いにも火傷は逃れた。引き家した拙宅附近は一軒のみで、まわりは空地と畑のみだった。材料置場で遊んでいた子供の泣き声にハットして、歩き出しても仲々たどりつけず、ふと表通りを見ると、港屋さんの土蔵が轟音を上げて崩れ落ちた。やがて妹の艶子（六才）が家庭内にいない事を知り、表に出たが、余りの激甚に人々は茫

然自失のありさまである。乳牛の一角より空に一直線に煙があがり始めた。水道は破裂し、町中を流れる小さな下水川も止まっている状態である。艶子は無事に帰宅したが、父がもどらないので、心配のあまり近所の人に元売捌所にいってもらったが、残念にも柱の下で父は圧死していたのを見届け知らせてくれた。使用人の加藤さんら数名が、鋸その他の道具で柱を切断し、遺体を運び出し、戸板に乗せて庭の槇の大樹の下に安置してくれた。私はこの悲惨な事故に遭遇し号泣した。間断なく続く余震に怯えながら、誰れもが生きている事に元気づけられ、被災を蒙りながらも、次第に心の中に落ち付きが生じた。水が出ないため、静岡の親戚から届いた富士梨で家族はのどをうるおした。米びつは壁砂に混合され、煮炊きは出来なかった。湘南軌道の空地には、次々、被災者が集まり、小柱竹竿を持ち寄り、雨露しのぎの仮小屋を張り出した。次第に夕暮れが迫ってくるが、電柱がへし折られ電線はずたずたに切られ、電気はないのでローソクを集めその変りにした。水は蔵の前の高橋宅の井戸から手桶でもらい、暗黒の中の一夜を過した。

一ケ所の出火は次々に広がり、火は風を呼び、風は火を呼び、火勢のなすままになった。そして、秦野町の中心地の四ッ角付近、二〇〇有余軒の家屋財産等を灰燼と化した。

水のない事も大災害の原因だが、突如として襲った大地震に、町民は誰れもが精神的に一撃を受け、なすすべもなく放心虚脱の状態で、自分の生命を守るのが精一杯だった。翌二日、父の遺髪を残し、手製の棺を作り、六甲寺に埋葬した。高橋鶴次郎五十一才、町議二期目の在任中、一瞬の天災に遭遇したものだった。小生一五才。私の将来の希望も転換せざるを得なくなった。

五間梁が姉弟三人の上に

（平　沢）　和　田　ソ　デ

九月一日、今の農閑日とでも云うのでしょうか、仕事は休みでしたので、ちょっと出掛けようと思い、髪を整え身支度をしていました。その時です、ドスンという様な、音と共に、家は上下に揺れ、歩く事すら出来ませんでした。当時の家は、泥壁でしたので、土蔵や家の壁が落ちるので、あたりは土色と化しました。家の中で、あそんでいた弟が、姉ちゃんと言って、すがりついてしまいました。私自身、身動きする事が出来ません。当時二才だったでしょうか、まだ、はいはいをしている妹があり、その子を、からだの下にし、覆いかぶさる様にして、どうなっても姉弟一緒だと思い、伏

せていました。その時です、五間梁と言う屋号の通り、五間の梁が、私達姉弟の上に、落ちました。しかし、わずか五寸程の空間があったので、三人は、かすり傷一つ負わずに助かりました。一応静まり、ようやくの事で外へ出てみると、馬小屋では馬の腹が地につくまで埋まり、どうする事も出来ず、家族の難を背負うかの様に死んでしまいました。正油の「モロミ」は、桶ごとどこかへ揺れこぼれ、土蔵の瓦、一枚、目に付く所にはありません。大黒柱の下の大きな石ですら、二間も先に動いていました。本当にすさまじさを痛感しました。食料は、丁度、米一俵を搗いて来たばかりだったので、近所の人々と重宝しました。婚家では、小麦一俵を乾麺に替へたばかりだったそうです。その後、乾麺は、常備する様、言い伝えになっています。今考えると、小さかった弟妹を助けようと思って、その場にいたので命が助かったのだと思います。

東海地震が騒がれている折、市役所等でも、色々お世話でしょうが、昔の人の知恵も出し合って、乳飲み子、幼児、お年寄り等の、避難・食料の確保には、常に気を配って生活しましょう。

弟は土壁が崩れて

（上今川町）　川　口　喜　助

私は、当時二〇才で東京で仕事をしていたが、家業も多忙で、八月十五日に秦野に帰っていた。九月一日には、青年団で東京の宮城に行くことになっていたが、私は、東京より帰ったばかりだったので参加をせず、使用人達と仕事をしていた。

雑談をしながら仕事をしていた。ちょうど昼頃、突然の大きな揺れに使用人達も右往左往していたが、ここは落ちてくる物もないので安心だと皆んなに言ったが、やがてガラスの割れる音などの恐ろしさで、大通りにころげ出たが、立つことはむろん歩くことなど出来ず、四ツん這いになり、波のように揺れ動く道路や家を見ていた。

やがて揺れも安定し、家族の者が心配で家の中に入っていったが、土けむりがもうもうとしており、祖母達に声をかけていたら、蔵と土壁のくずれた下より祖母が助けてくれと呼ぶ声がしたが、土壁などを動かそうにも一人ではどうにもならず、近所にいた人達を呼び集め助け出したものの、祖母が抱いていた弟は、土壁と祖母の間で動かずにグッタリとしていた。祖母は早く医者に連絡をと言ったが、こんな時に医者など来ようはずもなく、弟を背負い医者に行ったがすでに窒息死してしまっていた。

幸い妹は、土壁の砂などに腰まで埋まり動けずにいたが、ケガもせずに助け出すことが出来た。

当時、人工呼吸法などを知っていれば、弟を助けることが出来たのではないかと今でも悔やまれることである。

又、逃げるにしても、落ちて来る物や、倒れる物を確認すればと日頃からの注意をしなければならないと思った。

その後、数回の余震があり近所の人達と尾尻の方の竹藪に行った。

そのうち、山に湖が出来たとの知らせで見に行ったが、山がくずれて赤はだの堀りになっており、これが今の震生湖である。

水は、臼井戸にもらい水をしたりしたが、食糧には特に困らなかった。

特に、乳牛方面の大火で片町も火止めをするため家屋の取りこわしをしたりしたが、幸いにも、近江屋さんの土壁などで火は自然に鎮火した。

私は、大震災で弟を亡くしたが、体験として言えることは、身の安全の確認をし、逃げるには、落ちてくる物、倒れる物の確認をすることを日頃より心がけ、特に火の始末に注意することであろうと思う。

畑のトウモロコシで飢をしのいで秦野へ

（平　沢）　草　山　権　平

時大正十二年九月一日午前十一時五十八分、朝から曇空で時折小雨があり、又南の空には入道雲が出ていて蒸し暑い日であった。

その時私は十六才、一番被害の多かった横浜の真中にいた。デパートの三階食堂で昼食をしていた。その途端に、地震だあーと云う声と共に、二、三秒でその建物は崩壊してしまった。食堂には天窓があったので、それをたゝき破って幸にも外へ出た。その間、約五、六分位であった。そして外へ出てあたりを望見すると、もう数ケ所から火の手がたち昇っていた。

それから、友人と二人で火の手の方向を見極めながら、根岸の競馬場へと避難行進を始めた。行手の道路の亀裂は余り大きくなかったが、水道管の破裂により道路は水びたし、電柱の倒れたもの半倒れのもの、その上、両側の家屋の倒壊で、通行は全く困難を極めた。特に、橋は全部落ちてしまっているので、その時は、誰かが付近のこわれた古材を集めて、流れない様に川面にくくりつけて橋桁とし、その上を荷縄の様な太い綱を張って、一列にして渡していた。本当に水に浸った吊橋であった。

橋を渡ると、地蔵坂外人在住の山手であるが、山の中腹にある外人住宅はガケ崩れのため殆んどが破壊されていた。

その間を通り抜けて、避難目的地、根岸競馬場へ着いたのは、多分午後二時頃だった。そこで大勢の避難者達と共に、付近の畑からトウモロコシやサツマイモを採り、井戸から水をくんで来て飢をしのいだ。その日にも余震があり、一時間に数回の余震でゴーと云う地響きがあり、一錘することも出来なかった。

朝になってから七時か八時頃、郷里に帰るべく友人と共に、保土ヶ谷方向に進み東海道に出た。一日かゝって茅ヶ崎に到着。友人の処に一泊した。この間にも、東海道には、一抱もある様な大木の松や二階家の二階だけが道にそのままのめっているので、人と自転車以外の通行は出来なかった。

茅ヶ崎に一泊、翌朝、いよいよなつかしの秦野に帰るべく出発した。馬入川の橋は全部落ちていたので渡舟で渡った。金目の桜土手は、大亀裂で両側は人が通れない位で、その県道を通過し、欠ノ上付近のガケ崩れ、四ツ角付近の焼跡を後にして、なつかしい両親縁者のいる曲松四角についた。そして互に無事だった事を確認し、涙を流した時、九月三日午後三時頃だった。

子を亡くした母の声と半鐘の音

（尾　尻）　竹　原　栄　三

前夜より降り出した雨も午前中には止み、二学期への心も新たにした大正十二年九月一日、午前十一時五十八分あの恐ろしい災害が関東地方を襲った。

私は、あの日、友達と七町八反へ、鈴虫を捕りに行く約束をしていた。自転車で友達の家の前まで来た時、突然、大地の上下動が起こり、三尺余り上の石垣にほうり上げられ、夢中で生け垣にしがみついた。私は、地震とは思われない出来事に、唖然とした。自分の姿も尋常ではない。身を起こしてみれば、目の前は、地獄の様であった。建物は砂煙を吹き上げて倒壊し、人々は悲鳴を発しながら逃げまどい、その有様は、地球がでんぐり返ったかと思われるような、まるでこの世のものとは思えなかった。人々は半狂乱だった。

空はどんよりと曇り、不気味な空気がうなるように聞こえていた。

私は、たゞ一瞬“自分がここにいる”という不思議な気持ちが心をかすめたが、足は夢中で我が家に向かって走っていた。家の前に立った時、棒立ちになってしまった。我が家も他家と変わらず、家はぺしゃんこになっていたのである。隣の養泉院という寺も、地面に草屋根がつき、倒壊していた。あまりの様子に言葉も出なかった。

ふと我に帰り、母や兄、二才になった甥が気がかりになり、附近を探しはじめた。

すると、この先の竹やぶに大勢避難しているということを知人から知らされ、夢中でかけ出した。みんな無事でほっとしたが、養泉院の建物の中には、小学校四年の女の子が二人いるというので、村の人達が大勢で救出に向かった。大声でさがし求める人々の声が、あたりの人をいっそうあせらせた。やがて見つかった時は、大きな梁の下敷きとなっており、すでに絶命していたのである。竹やぶの避難場所へ遺体を運び、一人は親元へ知らせ、引取り方を依頼。あまりにも悲惨な光景に、皆して涙を流したことであった。

この二人の女の子は、地震を感じ、いったん外に飛び出したが、あまりの恐ろしさに、再び屋内へかけ戻り、梁の下敷きになってしまったということである。この類の話は後にもよく聞いた。

外が安全か、内が安全かは、その周囲の状況や家屋の構造、耐用年数などによって差違があろうが、家族一同、皆知っておく必要があるだろう。

もう一つ恐ろしいのは火災である。ふだんは静かなこの秦野の町も、長時間にわたって半鐘が鳴り響き、夜は赤々と空をこがし、火の粉がふりしきったのである。

私は、震災記念日が来る度に、忘れたくも忘れられないあの日の恐ろしい光景を思い出す。我が子をなくした母が、一晩中、我が子の名を呼び、泣き叫ぶ声と、鳴り響く本町の火災の半鐘の音に、罹災者一同、泣いて過した夜の不安と絶望が、今もなお強烈に胸のうちに思い起こされるのである。

五・六日頃になって、各地県より救済物資が届き、町役場より各町村内へ送られ、私達子供は親ざるを持って食料品や衣類品の配給を受けに行った。この事は、受難中、唯一の救いであった。

数日後、倒壊家屋の整理、一時しのぎのバラック建ての仮住いが始まり、序々に復興への工事が起こった。現代の時点とは違い、支援の道もなく、殆んどの人は土地を売り、土地のない人は借金をして、復興へ昼夜を分かたぬ努力の連続であった。器材や金物類の暴騰や、各職人の賃金のはね上がりは、その努力の上に重くのしかかった。

ちょう度、この当時、「この際」という言葉が流行し、良い事につけ悪い事につけ、「この際だ、我慢しろ」と、親兄弟や先輩から言われ、又、後輩にもよく使ったことが思い出される。

ようやく立ち直ったものの、昭和四・五年より不況の嵐に見舞われ、長い間、辛苦の道を歩んだ人が少なくない。

この恐ろしい地震が、二度と再び起こらぬことを願うのは誰しも同じだが、科学の発達した現代でもなお、自然のなせるわざの前に如何ともしがたい。したがって、私たちは常に人命尊重の上に立ち、グラッときたらすぐ消火する心がけと、避難のし方

や場所の確認など、ふだんから、家族や地域の人と話し合うと同時に訓練しておくべきだと、当時を思い、つくづく考えさせられるのである。
備えあれば憂いなしである。

我が子の名前を呼びながら

（名古木）　大　木　チ　ヨ

あの日あの時、大正十二年九月一日正午二分前、私（当時十五才、東田原在住）は、食事を済ませ本を読んで居ました。その時、「アッ、地震だ！」と思う間もなく、物はバタバタ落ち家は傾き、外を見ると、四メートルある石垣の上にある土蔵が、土煙りを上げてなだれ落ちているのです。これは大変と、やっとの事で外に出ました。地割れして、止めどもなく大きく揺れるので、妹たちが「怖わいよ姉ちゃん」と、取り付き、皆でかたまって居りました。少し落ち着いてきたので、竹藪に行きました。出かけていた父が帰り、皆無事で安心しました。「今秦野町は、大火事だ」と、申しておりました。前の田の畦を、一人の男が、名前を呼びながら我が子を捜していました。揺れる足どりで子を想う親の姿は、神々しく今も頭から離れません。その後、名古木玉伝寺に、震災供養塔が建てられ、名古木落合の十八名の尊いお命を失われた方々のお名前と、お年が、今尚はっきりと刻み込まれています。八十五才の小泉ギノ様から幼子まで御家族の皆様方の心情想う時、いまもなお悲しい思い出として残っております。今後、この様な大きな地震のない事をお祈りします。

倒れた腹の下で地面がパックリ口をあけて

（名古木）　小　泉　作　造

大正十二年九月一日の関東大地震は、私の小学校高等科二年の時で、通学途中であいました。

当時東秦野村には、東雲、田原、開進の三校ありましたが学校統一のため三校共に解体され、私達は田原の中庭にあった会館で、午後一時からの二部教育に通学しておりました。学友と共に現在の西沢橋附近において、地震にあい、その第一震で地面にたたきつけられました。四つん這いになって、道路側の竹藪に逃げようとしましたが、気があせってただ樽のように転っておりました。

現在の西沢橋は、当時は橋でなく、普通の農道でした。側の竹藪に逃げようとして、両手両足をつっぱって無中になっている時、道路の一部が急に陥没して、私の腹の下へ、パクリパクリと地面が口をあけて迫ってきました。目の前には、五・六メートル前の山が崩れて、その土砂が勢いよく生物の様に、私の頭の上にのしかかって来るようでした。その時の恐ろしさは、文字にも、言葉にもとても形容できません。

その時受けた両足の傷跡は、五十八年経過した現在でも、はっきり残っております。

地震が少し静かになったので、崩れて倒れている所を伝って、米造氏宅へはい上ると、同家は全壊しておりました。我家に帰ると我家も全壊、隣家の武雄氏、友一氏、純造氏宅も全部倒壊しておりました。

私のところから御嶽神社の方を見ると、道路は大小の亀裂で、それが余震で豆腐をゆすっているようでした。

神社までの人家十数戸は、一戸残らず倒壊しておりました。その当時、県会議員の選挙がある予定で、名古木の大木藤造氏が立候補して、現在、市の消防団第三部のポンプ置場の側の堂が選挙事務所でした。地震の日、その堂に行っていた私の祖父市三郎は、その堂が倒壊したため、圧死してしまいました。遺体を引き取りに行った父が、豆腐のゆれるような道を、祖父を背負って踊るようなかっこうで帰ってくる姿が今でも瞼に焼きついています。後日ではありますが、私の家が倒れたのは、地震だけでは無いと思いました。それは私の家の地盤は大変良く、少しの亀裂もなかったからです。

私の家の周囲には、数百年の老木が沢山あり、その中に木の中が空洞になっていた大きな椿の老木がありました。それがゆれている最中、根元から折れ、屋根に倒れかかって家を押すような格好になったので、柱の長さより遠くまで庭に押出されたものだと判断出来たのです。

昔から家を、風や火災から守る為に、家の周囲に大きな木を育てておきましたが、老木は危険だと言うことも、考えなくてはいけないと思いました。もっともそのお陰で、お勝手にいた祖母、母、姉、妹の四人は、本家が飛び出した為に、お勝手が屋根の外になり、傷一つ無く、全員無事でした。

以上のような地震の恐怖を、体験した人が、今では本当に少なくなりました。

体験記を書くにあたって、そうした災害が再び起らないよう心から祈念してやみません。

地すべりで児童二人が生きうめ

（名古木）　井　上　千代吉

関東大震災は大正十二年九月一日、亥の年、農家の人は御存じでありましょうが、当時の農家は、葉たばこ作りが農家の主業でありました。この年は天候も良く、総ての作物が豊作でした。中でも秦野葉たばこは、八月の天候次第ともいわれる程、最も大事な月であった。また、良い時には良いことが重なり、雨がほしい程天気続きであった所へ、八月三十日の夜から三十一日に相当の雨があり、これこそ、早天の慈雨でありました。この様な天候は、何十年に一度と云うあり様でした。

当時、徴兵検査の制度があり、私は大正八年に、この検査に甲種合格したので、兵種野砲兵として、同年十二月一日野砲兵第十五連隊第六中隊に入隊（千葉県市川市）した。満三年間軍隊教育を受け、昭和十一年十一月に除隊しました。

大正十二年九月一日、十一時五十八分、当時の農家は、昼食を十一時にとっていましたので、私は食事を済ませ外に出ました。ふと西南の方を見ると、平沢方面に土煙が上がっているのが見えた。と同時に、ぐらぐらっと来たので、地震だ大変だと思い、家族の者達のいる家の中へ飛びこんだ。台所で、たおれている母が目に入ったので、急いで外へ出すと同時に家がつぶれた。

また、父と子供が、家の中にとり残されていたので、大声で叫びますと、中から返事が戻って来ました。声を便りに、中に入り込みやっとのおもいで、助け出すことができました。当時、私は落合に住んでいたが、まともに建っていた家は、ほとんどなく、東秦野村では、二百数十戸が全壊してしまい、唯、みんな茫然としていたのであった。

余震は、その日だけでも、何十回となく続き、また大きな地震が来るやも知れぬという不安でいっぱいであった。そのうち、本町（昔の秦野町）で、火災が起こり、消火活動も思うようにならず、秦野町中心部は、ほとんどが焼失してしまった。当時の家は、屋根が重く土台が、しっかりしていなかったので、カワラが、屋根から落ちて来て、非常に危険であった。

また、危ないのは地すべりです。丁度その頃、東秦野村学校が統一される事に決定され、取りこわしが始まりましたので各学校の生徒は、寺の本堂で教育を受けて居りました。地震の起った時、児童が休み時間で表にいたとき地すべりが起こり、寺の東側の山が高さ五十メートル、巾七十メートルにわたり地すべりし、児童二人が、生きうめとなってしまった。村の人や消防団が総出で探したが、とうとう見つけ出すことが出来なかった。この二人がいとこ同志であったので、後に、いとこ地蔵を寺に建て

供養した。山の下の集落は、地震の時に、いかに危険であるか、この様な場所の事前対策の必要性を痛感する次第です。

最後に、私の震災に対処する精神は、一、恐怖に負けない心　二、奮闘心を強く持つ心　三、近所同志助け合う心　四、勇気をもって行動する心　五、国民は皆兄弟である心　が大切であると思う。

天災に対する私の信念

（北矢名）　小　林　な　み

この世に生を受けて七十年余年、様々の天災に遭い、また数々の人災も見聞きして来ました。天災に対する私達は、無力でも人災は、各々の注意で避けられます。人類の不幸も日頃の注意、備えで、半減されるものと信じます。私の体験から、天災は驚いたり、心配するより、常に冷静な判断と敏速な行動が必要だと思います。どんな大地震でも、一瞬で潰れることはありませんから、落ちついて行動し、最小限度の生活必需品を持ち、広い空地に避難する。決して欲を出さないことが肝心です。火災発生の場合でも、初期消火に全力をそそぎ、自家からは、絶対に火を出さないという気構えが必要です。月に一度位は、各家庭で、レクレーションの心積りで、子供さんも入れて全員で防災訓練をして見てはいかがでしょう。日頃から、親は子供に火の恐ろしさ、地震の時の落下物があぶないこと、避難場所をどこにするかなど、体で教えておくことが必要だと思います。我家では、ガスの出る所の窓は、ガス漏れと室内換気のため、いつも明けておきます。私は二十年位前に、石油風呂の工事の不備で、一酸化炭素中毒で倒れた事がありました。主人が急いで家中の窓を明けてくれましたので、翌朝には元気になりましたが、どんな場合でも己一人の力には、かぎりあること、いつ災難に遭うかわかりません。古い言葉ですが、何時の時代でも助け合いの精神が大切だと思います。この精神の上にこそ、行政の力も、迅速かつ効果的に、市民の中に浸透出来るのではないでしょうか。

樹木は生命あるかのように身をよじらせ

（北矢名）　平　井　善　造

大正十二年九月一日、東京、横浜周辺は夜明けから南風を伴った雨であった。雨は午前十時頃にあがり、再びむし暑い夏の日盛りをむかえた。やがて昼近く正確には、午前十一時五十八分マグニチュード七・九の大激震が関東一帯を襲った。私の家では農家でしたので、“タバコのし”をしていた。するとがたがたと揺れ始まり、初めは大きな地震というよりは、日常ありふれた震動が二分位続いた後、「おやっ」と思う間にだんだんと大きく、ますます激しくなり、皆が酔っぱらいのような足取りで外に飛び出した。間もなく家がつぶれ、屋根は踊り、垣根のマキの木は道路に崩れ落ち、庭には大きな亀裂が二筋も出来ました。樹木は生命あるかのように樹身をよじらせ前の田んぼは土が盛り上りなんと恐るべき一大事の出来事、話にも絵にもできません。

当時、家の者はおじいさん、私、家内、四才の男子一人でしたが、皆怪我もせず奇跡的に助かりました。

当時の恐ろしさを思い出すと話しながらも時々身をふるわせる思いです。人により体験の差があるようですが長い恐怖の後、ようやく我をとりもどし近所の家や、部落を見ると家屋は皆同じ方向につぶれ、お年寄など三、四人が亡くなっていました。

それも当時は、家々がまばらで、しかも火災が出なかったのが大事を最小限にくい止めたに違いありません。それからは近所の人達と一緒に竹藪の中にむしろを敷き、又、家では、小屋がつぶれなかったので、その上にむしろを敷いて久しく寝たり食べたり過ごし、仕事のあい間に草屋の屋根をむしったり、かたつけたり大変な事でした。

それにしても天気が続きたすかりました。

いずれにしても、この地域は田舎でしたから、首都や町々のような災害とは異なっていました。道路や山が崩れ、川と田んぼが埋まり、そこに水がたまって湖のようになってしまいました。災害復旧には、山路を登ったりしながらも、私はキリンなどの道具を名古屋から取り寄せ、積極的に部落の家々を起す作業にまわったりしました。

本当に大震災の悲劇は語りつくせない体験でした。“天災は忘れた頃にやって来る”“大地震は必ず来る”と言われています。昨今では、二次災害の危険を最小限にすることや、その予知や研究が進められているが、文明国がはたしてどれだけ対応できるか、それは個人の自主防災対策にあろうかと思います。

家の下敷になった息子夫婦を置いて

（鶴　巻）　小　川　俊　子

当時、横浜市大和町に、住んでいました。あの日は、朝から異常な暑さで、ザァーと、にわか雨が通り過ぎたかと思うと、ギラギラと太陽が照りつけ不快指数百パーセントとも言える程でした。一才二ヶ月の長男が、少しお腹の具合が、悪かったので、近くのお医者へ行き、診察台に寝かせた、とたん、ドンドンドンと、激しい上下運動が起り、始めは、何事かと思ううち、診察台にしがみついていました。少し治まったので、外へ出ますと、水道管が破裂したとの事で、水がひざまでつかりました。家の前では、道路に雨戸を敷いた人々が、あまりの恐ろしさに、手を合せてありったけの神様、仏様を一心不乱に拝んでいました。

真赤な空が、次第に近付いて火の手が迫って来ましたが、如何とも、なすすべもなく怖さに、震えるばかりでした。私は、火から逃れる人々の後について、夢遊病者の様に歩きました。適確な情報等何一つなく、間断なく起きる余震におびえながら道路で夜を明かしました。見渡す限りの焼野原で、身を寄せる所もなく次の夜は小さなお宮の境内へ行きましたが、むしろの上に、五十才位の男の人が全身布にくるまって、血が全身に、にじんでいました。そばに大学生らしい人達が、「先生、先生、先生」と、大声で呼んでいましたが静かに息を、ひきとられたのを、目の前にしました。その先生は、重傷を負われ、出血多量で亡くなられたのでしょう。何の手当も受ける事が出来ず、私も涙が止まりませんでした。やっと家族と落合って、焼残った知人を尋ね、泊めて頂きましたが、焼出された人々で夜、横になるのが、やっとでした。そこで初めて細長い外米と、味噌蔵の焼跡から拾って来た味噌とで、ネギの味噌汁を、食べました。それまで、何も口にした覚えがありません。食べ物どころではありませんでした。近くの方が、串にさした里いもを、子供に持たせて下さったのを、有り難く、今も忘れません。身を寄せる所もないので実家の三重県へ帰ろうとしましたが、鉄道は動いていませんでした。そのうち清水港迄、船が出る事を聞きまして、九日の朝横浜港まで歩きました。何時に乗船出来るとも判らない長い行列は、炎天の下で、焼つく様でした。やっと大洋丸に乗れた時は、着の身着のまま、お風呂に入る事もなく、それは全身汚れてひどいものでした。詰め込まれた甲板は、いもを洗う様で、言語に絶する有様でした。人づてに、清水港に船の着くことを、知ったのでしょう。親族の人達が出迎えてくれ、無事であった事を、大層喜んでくれました。旅館に落ち付いて初めて正気に返りました。清水から実家へ帰る列車では、駅ごとに、果物、お菓子の慰問品を初めて頂きました。私の体験を申しますと、金庫・本箱・タンス等倒れて下敷

きになって、亡くなった方を、数多く知っています。頑丈なものでも置いてある物には近よらない事です。一階より二階の方が安全度が、高い様でした。恐ろしいのは、火災です。知人のおばさんから伺いました話では、家の下敷になった息子さん夫婦を、助け出す事が出来ないうちに火の手は迫って来て、末っ子の幼い孫が、早く逃げようと、泣き叫ぶし、息子夫婦からは、逃げてくれと、手を合わせられ、近づいて来る炎の中に、二人を置いて、逃げなければならなかった事を、涙ながらに、話して下さいました。私たちは、命からがら、助かったものの、一才三ヶ月の幼い子に、何を食べさせたのか、呑ませたのか、記憶にありません。が、良く何事もなく過ぎて来たと、感謝しています。火事の恐ろしさは、今になっても身にしみています。どんな小さな地震でも、本能的に火を消すことを忘れません。火を出さなければ人命はもとより、貴重品も、食糧も、助け出す事が出来ます。

五十数年前とは違い、今では、コック一つで火を消す事が出来るのです。揺れが、静まってから消したのでは、遅いと思います。逃げ出す時は、必ず履物を忘れない様に、私は、空襲の時もはだしでしたので、けがをしたり、苦しい思いをしました。無理な事かも知れませんが、落ち付いて行動しなければいけないと思います。唯一人でも、火を消す事をしなければ、大火になり、自分共々、苦境に立つ事になります。

突然ドーンという地鳴が

（鶴　巻）　山　田　竹　雄

大正十二年九月一日午前十一時五十八分関東大震災、これは私が過してきた五十余年の内一番大きい出来事でした。忘れも致しません。私が当時八才で小学校へ入学した年でした。この年八月二十日頃よりしとしとと降り続いていました。が、この日は、九時頃より降り続いていた雨も上り、庭には緑苔が生えていました。

その頃の私の家は十三人の大家族で、その中には兄嫁も一緒でした。十三人の中の一人、山田福三と言う兄は、八王子へ人力車夫として行っていました。その兄が前日に来ていました。お土産として私と弟に、当時としては珍しい、細い市松模様の洋服を買って来てくれ、二人は大喜びでした。

そして、九月一日は小鮎村と言う隣村の親類で、お祭りがあり招待されていました。当時農家では、昼食は十一時でしたので、その時は昼休みで父や母は台所で昼寝をしていました。他の者は座敷と奥の間で寝ていました。当時二才の子は、奥の座敷の仕切のそばへ寝かせておきました。他の子供は昼寝をする者、大正琴を弾く者、尺八を

吹く者ありでそれは大変でした。

私と弟は、お祭りへ行くために買ってもらった洋服を着せてもらっていました。私がズボンをはいたとき、突然ドーンと言う地鳴りとも言えない音と同時に大きくグラグラと来ました。さあ大変だ、表が近いのに父母が台所にいたので皆、裏までまるでひよこのように親の後を次から次へ飛び出しました。そして近くの竹藪へ逃げ込んで一応落ちついた。この間、何分間か、両手で竹につかまっていたが、まるで大きな船に乗って、ゆられている気分でした。そして皆集まって人数を調べると、一番下の二才の弟が家に寝かせたままで皆逃げてきてしまった事に気付いた。それは大変と父が助け出しに行き、でもまだその時は多少揺れていた。ようやく抱いて来たが見ると逆さに抱いていた。

地震が発生して何分か、ずい分長く感じた。地震を生れてから誰れにも教わった事はありませんでしたが、その時に私は、あ、地震だと直感しました。今でも本当に不思議でなりません。それから後で分かった事ですが、皆が逃げて来た後、裏の崖は崩れ、納屋は押しつぶされ、皆で入ろうとした穴蔵は崖崩れでふさがっていました。あの時入っていたらと思うとぞっとします。それでも家の方は何代か続いた家で丈夫に出来ていましたので少し傾いてはいましたが、崩れるのは免がれました。四、五日間の間は、まだ揺れていたので庭先へ蚊屋をつって皆で雑魚寝をしました。そして地震があってから一日位して津波の騒ぎもありました。

あれからもう五〇有余年、逆に抱かれて助け出された弟も何のめぐり合わせか九月一日に他界しました。もうあんな恐い思いはしたくありません。私が八才の時に経験した思い出です。

庭に地割がバックリ

（堀　西）山　口　キ　ミ

十七歳の九月一日の出来事でした。

其の日は、真夏のカンカン照りの暑さとはちょっと違った異様な蒸し暑さだった。

昼食を早く済ませて、後片付をしようとした時、突然“ズドーン”“グラグラ”“ガタガタ”音という音全部、家畜のさわぐ声が四方八方から、目茶苦茶に世の中が割れた様なすさまじさ。ふと、我に返り、地震だと気が付く、地震の時の避難の知識も何もない私達家族は、あわてて外に飛び出し、右往左往、父母は子供達を、子供達は父母を、お互いに呼び合い、生存を確認し合い、その間にも地震はやまず、ぐらぐら大

地は動き、広い庭の真中にヨシズを敷き、家族は肩を寄せ合った。日頃平らな庭も、見る見るうちに、パクリパクリと口が開き、今思ってもあの時、誰かがはさまってしまったらと、ゾーとする。遠くの山々は赤裸、岩や石はまるで雷が落ちた時の様にゴロゴロ、村の民家は三分の二が潰れ、川原は崖崩れの岩や石、赤土が入り混じり、田か、山か、川か、区切りもなく、ものすごい音を立てて大木が、グルリグルリと、まわりながら川下へ流れて行く、これ以上言い表わせないものでした。

ただ、驚いてばかりいるうちに時間が経ち、空腹になり、何か食べなくてはならない。飲み水はなし。其の中で一つの救いは、農家だけに穀物はどうやら有りました。これを口に入れるまでが大変なのです。やっと、見付けた水は、赤土混じりで真赤であり、この水でお米を洗い、オジヤを作り、何と味噌を入れたかの様である。おいしいわけがない。場合が場合だけに、ぜいたく言っていられなく、目をつぶり、口に押し込んだものです。夜になれば灯はなし、ローソクも店に売ってない。ランプに使う灯油などなおさらない。毎日、村の方が集会を開き、知恵をしぼりだしては、腰に弁当を付けて町に買いに行き、其れを分け合う、親切な人ばかりでした。それからも、何日も何日も大地は揺れて、人々をおびやかしました。その時私は十七歳だったので、今なお、脳裏にはっきり焼きついている。

あれから、五十余年、人間の力は強いものですね。あの時の事は跡形もなく、今では文化も発達して、住み良い平和な町だと、よろこび、長生きしたいと思います。

地面をゴロゴロ

（渋　沢）　小　室　サ　イ　子

忘れもしません、九月一日の大地震、只今でも身ぶるいがします。

昼食後、ちょっと座敷で休んでいますと、ヅシンという音と共に大きな地震。素足で庭先に飛び降りました。あの時の地震は、横に揺れず上下に揺れて、顔が地面に当って、ゴロゴロころがってしまいました。歩くことも進む事も出来ず、気が付いてみると、六十坪位の家は、皆崩れて倒れていました。その後も時々、土蔵が崩れて、砂煙りが空高く上り、火事ではないかと思うくらいでした。幸いにして、私の家では食事が済んだ後でしたので、火は使っていませんでした。二、三分ごとに、ヅシンヅシンと音と揺れで、生きた心地はしませんでした。その時、秦野町は、火災が起って空高く煙が立ち登り、夜は、空一面真赤、二日二晩燃え続けておりました。

一ヶ月余りは、余震が五、六分経っては揺れ続けました。私宅でも、一ヶ月余りは、

前の畑で、家内中が寝起きして暮しましたが、農家でしたので、大した不自由も無く過すことができました。

グラッときたその瞬間

（堀　西）　岩　田　与　一

大正十二九月一日午前十一時五十八分の大地震は、グラッと来た瞬間に何が何だか分らない内に、家は傾むき床板は落ち壁はもうもうと砂煙を上げて落ちておりました。私は弟と二人で庭の煙草を乾燥する孟竹の柱に、つかまっていました。

家には父も母も居ません。地震が少し小さくなった時、家の中に二人の妹が居るのに気がつき、連れ出しに家の中に入ると、二才の赤ん坊は箪笥の上段が落ちて背中に怪我をしていました。どの位時間が経ったでしょうか、母がそして父が帰って来て物置の大戸を庭に敷いてその上にいましたが、朝まで降っていた雨が止んで陽がかんかん照りつけて暑く、裏の分家の母屋が倒れたのも知らない位でした。父が頻に姉が小田原の紡績会社に勤めて居るので、身を案じていましたが、夜の明けるのを待ち切れず、握り飯を持って暗い内に家を出ましたが、夜おそくなって、近所の人と戸板をかついで帰って来ました。父の話によると姉は、工場の建物が倒れシャフトの下敷となって最後に助けだされたとかで、近所の人と二人で戸板に乗せてきましたが、道は、がけくずれのため河原に降りたり土手を上下し、道路に出れば割れ目が多く二人の難渋する姿を見て、方々の村人が見かねて一肩かつぎましょうと手助をしてくれ、人の情の厚さに涙が出たそうです。三日の日は又雨でした。天幕もトタン板も少い時代座敷の中で何時でも飛び出せる様にしていましたが、小さな余震は度々おそってきます。

井戸水はにごって飲めず、四十八瀬川の水は山崩れの為ダムとなり、その後の大雨で決壊して堤防がこわれ、田を流し、道は石垣がくづれ、立木は倒れました。又家は傾むき、照明用のローソクは値上りし、手に入らず、水車は止り（動力精米所なし）臼で米をつく有様でした。しかし、東京横浜に比すればまだ田舎はよい方でしたが、それでも波多川で死者（子供）一名。倒れた母屋二棟の外怪我人多数ありました。

つぶれた家の中で火の始末

（柳　町）　土　屋　文　蔵

地震による被害状況

山津波、ガケ崩れ……山の家は一転してガケ崩れで所どころ緑を残すだけ。裏山の大木はなんと横だおし、そのやわらかい土を雨が押し流してくる。本当に手を出せない様である。

火災、火の始末今思い出してもぞっとします。田舎の草屋根、大戸を開けると大きな土間、その隅に台をして米俵が積んである。雨でのら仕事がないので、その土間では、にわか作りのコンロに火を起し、繭を大きな鍋に入れ、糸を取っていた。父は縁側で竹細工、僕はそばで近所の友達と遊んでいた。この瞬間地震。やむどころか神棚からがらがら何か落ちてきた。そのうち真暗になった。家がぺっちゃんこ。父は何にやら押えつけられているらしくこれをどかせとどなっているのが聞こえた。どこどこかけより無我夢中でまわりのものを取りのけた。家がつぶれたので何処が出る処かわからない。母はどうしたろうかと声をかけたら「こっちの方が出られるよ。」と声がしたので、その方を見たら少しあかるい所が見える。手さぐりで土間に降りて母の居た処を通ろうとすると、母は仕事をしたままで火の始末はしてなかった。すばやく残り湯をかけ、鍋をぼっかりコンロの上にかぶせて、父と共に草家をかき分け、あかるい屋根の上に出た時のあかるさは今でも忘れられない。隣の家を見たら、やはりぺっちゃんこ動く事も出来ず三人でしばらく眺めていた。

子供を抱えて竹やぶに

（柳　川）　守　屋　イ　チ

大正十二年九月一日、もうすぐ昼御飯だという、午前十一時五十七分頃、突然大きな地震があった。家が揺れ出し、びっくりして足がすくみ、呆然としている内に、家が傾きはじめ、三才になる長男が、外で遊んで居りましたので、夫は、すぐ飛び出し、子供を抱え、家の中にいた私に向って、「早く出ろ、早く出ろ」と、大声で叫びました。

私は、生れて十四日目の次男を、抱えて、裏から外に飛び出し、隣の家竹藪に駆け込みました。着くと間もなく、大きな音がして、家が倒れてしまいました。其の家は、前年大正十一年五月に出来上ったばかりで、六月一日にお世話になった方々を、お招きして心ばかりのお祝を済せたのが一年と三ヶ月前のことでした。

また、時々余震がありましたので、私は二人の子供を連れて、隣のおばさんと本家の竹藪に移りました。本家では、私の母が、七才を頭に三人の孫に御飯を食べさせておいて、外で働いている人達を呼びに表に出た途端、地震が発生し歩く事も出来ず、子供達の名を呼んでいるうちに、家が倒れてしまい、中に入る事が出来なかったと言うことです。そのうち倒れた家の中から、大きな泣声が聞えたので、その場所を壊しましたら、三人共無事で、皆で喜び合いました。

その喜びもつかの間、前の家のおじさんが藪に来られ、昨夜から朝にかけての大雨で、水量が増し、川に魚を取りに行ったが、大きな地震にびっくりして、家に帰って来たら、家は潰れて、家の者が誰も見当たらないと言われましたので、竹藪から皆で出て行き、方々を捜したところ、おばさんと十才になる女の子が、軒下に潰されて亡くなっていられたそうです。皆と一緒におじさんも、藪に戻り、手には一升ビンを下げておりました。捜しに行けなかった人達は、その話を聞き、涙を流しましたが、おじさんは、俺が無事だったから泣くでないと言って、一升ビンを口にして、酒を飲んでおられました。亡くなった方の話は、あちらこちらで聞かれ、男の人達は今後の対策相談に、女の人たちはおにぎりを作って、夜は皆さんで藪の中で食事をし、手ランプをつけての食事を済ませ、それぞれの家に帰りました。幸い本家の井戸水がありましたので大変助かりました。

私達は、本家の煙草乾燥室を片付けて、一時住める様にして頂きました。昔の家は、草屋根が多かったので、地震の時には表に出ないで裏に出る様にと、小さい頃から聞かされておりました。手ランプはいつでも使えるように用意してありました。手ランプとは、手に持って歩く小さなランプです。今では、何処の家でも、懐中電灯を用意してある事と思います。私も、懐中電灯とか、薬、マッチ、小遣等は、いつでもすぐわかる様にしておきます。まだまだ、思い出は沢山ありますが、なにせ慣れない事なので、上手に書き表わす事が出来ません。

地震から一ヶ月位、本家で御世話に成って、自分のバラックに移りました。

それから、ここに五十余年、私も七十七才となり、国民年金を頂き、老人医療費も受けて、家族七人で毎日楽しく過しております。

いくとせか
世の荒波とたたかって
心ゆたかに
感謝するなり

火事は秦野町内を焼きつくす

（幸　町）　石　田　寿　子

関東大震災の起った時、私は幼稚園の二年生だった。あの時の不安とショックは幼ない脳裏に強く焼きついていてその時その時の情景が五十何年たった今も忘れないのです。

大正十二年九月一日、幼稚園から帰り母と勝手で昼食をとっている時、グラグラと来たのです。一瞬ためらったのですが、だんだんすごくなるので、母に手をとられ奥の間に駆けて行きました。そこには弟が寝かされていました。母は急いで赤ちゃんだった弟をかかえあげ、二、三歩ふみ出した時、タンスが布団の上に、倒れてきたのです。私達は無中で廊下から裏の畑にのがれました。人の運命は誠に紙一重です。一瞬母がだき上げるのが遅かったら弟の命はなかったでしょう。それからたびたび大きな余震がきました。余震は富士山の方からグーンという無気味な地鳴りの音がして来たかと思うとグラグラと来たのです。そして地割がひどいので、板の上に皆かたまっていました。

それからしばらくすると火事が起りました。子供等は危険なので一キロ程離れた本家の工場の男性が来て連れてゆかれました。度々の地震の襲来とその上に火で攻めたてられ父母はどんなにか大変だったろうと思います。でも火事は私の家から五十米程先で消えてくれました。大道の片側は大熊さん、片側は今の忠実屋の駐車場、元は大安正油屋のコンクリートの倉庫のところで火は止まりました。その時の火事は秦野の旧町内のあらかた中心をなめつくしました。その時不思議な事に今の横浜銀行の裏の観音様だけがぽつんと焼け残りました。火事がおさまれば、笑い話になりますが、裏のおばさんは、自分の赤い腰巻を物干の先に干して、マンゼマンゼと唱えて火ぶせのまじないをしていたそうです。

家も少しかたむいたが倒壊を免れ火事にも免れ安心したのですが、余震のためいつ家が倒壊するかわからないので当分バラック生活が続きました。

町の水道も土管だったので所々破裂して通りを水がふき出し流れていました。

そして食物にも困りました。幸い親戚先に米屋があったので米を分けてもらったのですが、電気が駄目になってしまっているので、米をつくることができず玄米だったのです。胃腸の弱い私はたいへん困りました。

日が経つにつれてだんだん落ち付きを取り戻し家の中での生活が始まりました。

そしてその頃になるといろいろな情報が入ってきました。相模銀行（今の横浜銀行の前身）の金庫が倒れ、銀行員の方が下敷になって亡くなったとか、家が倒れはりが

落ちて来て亡くなったとか、秦野でも随分亡くなられた様です。東京の被服廠に逃げた知人の方は真赤な焼けトタンが飛んできて腕が片方もげて帰ってこられました。

それから何日かたったある日、被災後初めてこざっぱりした身なりをした母に連れられて、アメリカからの援助物資をいただきにまいりました。品物が道路の片側にずっと並べられていました。私たちは毛布と金たらいをもらってきました。

消火作業の間に我が家が灰に

（栄　町）　山　村　徳　次

私は、大正十年八月に、旧曽屋二三七〇番地に細々と、理髪営業の開店をいたしましたが、機具機材の不足から、どうしたら安心して業にいそしむ事が、出来得るかと念じつつある時に、大正十二年九月一日関東大震災に出合いました。大揺れ後、前の旧安藤郵便局（三嶽医院の前）では、ベランダが倒れ、はがきを入れに来た子供（武本下駄屋次男様）が下敷となられたのを見て、警察署員・関野・和田両巡査様に、お願いして、ベランダの下の子供をかかえ出して、本宅にお届けしました。私の白衣は、子供様の頭の大怪我の血で、大きく染められた。道中（上宿通り）では、壊れている五、六軒の家があり、其の中で、中村肉店（中村フード・センター）の二階は、その形のまま、道路に落ちて道路一杯なので、その中を通り抜けて、武本下駄店に着いた。隣り近所は、怪我人だらけで、相模銀行（焼けた後、興信銀行と呼ばれた。）四ツ角際では従業員の大怪我騒ぎで大変でした。時の警察署は、四方が、切り石にて築かれていても類焼してしまいました。（大磯警察秦野分署と呼ばれ、分署長は小林正基氏）。

あちらこちらで、怪我人だらけと聞き入る時に、大正通りの一角寄りが、火災との事で、私も（第六部の）消防員でありましたので、早速、器具置場からポンプにて火事場へ急ぎましたところ、当時町立小学校が設置されていた（上宿の観音様の横）裏際に榎本材木店があり、その材木が、自由に横倒れしており、整理しながら、やっと火事場についた。が、県下一位と言われる土管水道が破損されて、水は出ず、河川の水も無くて、どうする事も出来得なかった。ポンプ車にて帰る途中、時の県会議員関野三十郎様のお宅も、母堂と長男の子供等が、梁の下敷きとなって、呼吸が止っているとの事でした。大工かとび職の人を探すよう頼まれようやく、見つけて、我が家に戻ったら、跡かたなく一瞬の灰となっていた。火は片町通りに焼け広がって、近江屋酒造店（近江酒店の所）の酒蔵が（七時半頃か）燃え盛りて火柱の如く空高く天をこがし得るのを見ながら、水さえあればと思った。警察署員の話に、四ツ角中心に、七

百五十戸程焼けていると聞き、寝るところと、食事や道具類の事を思い浮かべているうちにいつしか朝となっていた。警察署員様は、お茶を呑みながらオニギリを食べつつ、なにやら語っていられたが、私は食べたいとは感じなかった。そのうちに、実家から、ツユ物と食事が届けられたが、食べる茶碗も箸も無くて、警察署員から湯呑み茶碗を借りて、箸は、炭俵のみごを使い食べた。その後に、焼け跡に、実家から頂いた釜と、実兄から開店祝いに頂いた鉄びん等を、焼跡から持って来たものの、置き場所と、食べる事と、寝るところの心配をしなければならず、その思いは今でも字に書き表わすことはできません。

水道は寸断空は赤く焼トタンが舞う

（入船町）　高　橋　仙　太　郎

大正十二年九月一日、前日よりの雨は朝まで激しく降り、九時頃には止み、驚く程良い天気、暑さも身にしみ、晴天、日本晴れに成りました。

私は今の本町小学校（旧名、曽屋尋常高等小学校）の六年生で、この日は、夏休みが明け、初登校日でした。授業が終わり、家に帰り、隣りの家の縁側で遊んでいた。帰ろうと思って居た矢先、ドカンと音がして、縁側が家より離れて、四十五度も傾き下がって来た。家はぐらぐら、何がなにやら夢中で、柱にしがみついて居た。歩く事などとても出来ない。外を見ると、土埃りで暗くなって来た。当時の家は皆、泥壁の為、崩れ落ちた土煙りの為でした。私はただ、おびえるばかりでした。其の内に、乳牛の方に火事が発生し、見る間に燃え広がり、上は大安醤油所（現在のダイクマの前）、下は片町の名古屋洋品店、上宿は警察署（現在の横浜銀行）裏の観音様の手前まで、入船町は登記所（現在、石井仏具屋、以前は梶山久次郎宅）の入口で止まった。水道は、土管の為、寸断され、火は燃えるにまかせるよりしかたなかった。今の様な消火栓は無かった。夜、暗くなっても空は赤く、焼トタンが天を舞った。後日、四ツ角の方へ行ったら、残って居る物は石と金物だけで何も無い、焼跡の広い事、驚くだけ、水がなく、燃えるにまかすと、こんなになるかと思うだけだった。

この日は、何回となく余震が来て、家の中では、とても寝られないので外で寝た。

夜になっても、まだ火事はやまないので、皆は火に追われ、荷物は風呂敷に包んで、背負って、子供の手を引いて、逃げて来た。誰も火を消し手がないからだ。

私の家でも焼けるかと思い、大事な物は外へ運び出した。今の専売公社の所が、畑だったので、そこへ逃げ、蚊帳を吊って寝た。火事は、曽屋（現在、渋谷歯科医）の

所で鎮火した。その隣りに小峰神社があり、丁度この日が祭りだったので、そのおかげだと曽屋の人達は言った。

困った事に、飯をたくのに水がなく、所々に、公用水くみ場が有ったので、種々、捜したが、水の出ている所は無かった。和田助義さん宅に井戸が有ると言うので行ったならば、心良く皆にくだされたので、たちまち、干上がり、なくなってしまった。その後、ビクニ板の水車の青木さん宅（現在、入船遊園地の大木の辺）に水があるというので、四方八方からもらいに来たが、水車の水道（みずみち）（非常にきれいな川）のそばなので、いくらくんでも減らず、非常に助かった。

五日か六日頃、雨が降って来たので、地の緩んだ山から泥が流れ出し、川は丁度、おしるこの様に成り、魚が泳げずその上をちょろちょろとしており、手でつかみ取りに出かけたが、その時大量に魚が死んだ。

何日か過ぎて、平沢の山が割れて大きな谷が出来ている、と聞いて見に行った。深い谷が出来ており、中には、大木が沢山有り高さは相当高かった。その後、再び友人と出かけて行った時には、細い枝の先が一寸見える湖水に成っていた。閑院宮様が演習に来られ、これを見て、地蔵で出来た湖水だから震生湖と名を付けられた。

道路も地震の為に各所で寸断されたり、尾尻のあたりでは、三尺位、段差が出来ていた所もあった。

今の湘南自動車株式会社は、湘南軌道株式会社と言って、客車や貨車が有り、二宮から秦野への、ただ一つの鉄道だった。その頃、台町に秦野駅があったが、専売所の荷物を運ぶ為、今の所に移っていたがまだ未完全であった。広い土地に沢山ある客車・貨車は、焼け出された人々が、丁度良い、住み家として当分の間、住み付いていた。

後に、ここが秦野駅だった為、昭和二年に小田急が開通しても、秦野駅を名のれずに、大秦野駅とした話も残っている。

又線路は、各所で破壊され、当分、開通する見込が無いため、家がこわれた人々は線路上に安心してバラックで家を造る事が出来た。

目の前の橋が波を打って崩れおちた

（本　町）　青　木　吉　長

私は、当時大川橋のたもとで自転車店を営んでいた。

大地震の前夜は大雨であったが、当日は午前中よりギラギラ光る暑い日であり、昼頃食事をしてまもなくゴーという音とともに、グラグラと大きく揺れ動き、同時に戸

外に投げ出されてしまい、そうこうするうち目の前の河に落ちてしまった。
　目の前の橋は木造であり、大きく波を打っているようであり、数分でほこりをたてて崩れ落ちてしまった。
　私は、平沢に住んでいて、店へは通いで来ていたため、かなりの余震の中を平沢に帰った、途中、家々は崩れ落ち夢中で帰った。
　幸にも、私の家は、けやき普請であったので傾きもせず残っていた。それが現在の藤館として移転し今でも残っている。
　しかし、急ぎ帰り、家のことばかりが心配で、子供のことに気がまわらず、少し経って子供が居ないのに気がつき捜したが見つからなかった。そのうち隣りに行っていることがわかり行ってみたら、土蔵が倒れており、その下になっているらしいので近所の人と掘り起こしたところ、三人の内自分の娘だけが運悪く亡くなってしまった。
　一人娘であり亡くなったことは、地震の恐ろしさとともに忘れることは出来ない想い出である。
　その後も余震は何日も続き、恐ろしさは話にも絵にも表現出来ない状況であった。
　自分の家にあった池の水は地震で無くなり、こいなども食べたが、別に水や食糧に不足はなかった。
　又、本町地区に大火があったが、水道管が土管であったため、破裂され水が使用出来ず、火を消す人もなくたいへんであった。
　その後四ツ角に大きなおけを置き、水をそこまで引き給水した。
　道路などの復旧は、皆の協力によりやった。
　私はこの大地震で子供を亡くしたため、この恐ろしさを一生忘れることが出来ない。

空は土煙で灰かぐらのごとく

（河原町）　五十嵐　米　廣

　大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突然関東一円に無気味な響きとともに、グラグラと、現在で言われているマグニチュード七・九の大地震、突然のことで何がなんだか見当がつかないほどであった。
　空はどんよりとなり入道雲、各家々は各所で倒壊し、土蔵や家屋の壁土が空へ舞い上がり灰かぐらのごとし、道路は横割れにビリビリ、巾六十センチから九十センチ間隔で深さ十センチから十三センチ位に地割れが起きた。
　河原町では、家はつぶれても死んだ人はなかった。

大震災の大ゆれの時、人は家の中より表にとび出していたが立っていられず、ごろごろと転っていた。

しばらくすると大きなゆれは静かになったが､危険で家の中に入る人はいなかった、五分から十分おきに余震は変なひびきとともに続き、半月以上ゆれは続いたと記憶している。そして、当日はだれもが自分の家に寝た人はなかったようだ、私の家族は命徳寺の竹やぶで、三晩位、夜を過したと記憶している。

人間は本当にせっぱつまると自己主義になるものである。秦野町の火事はだれもが知っていたが、一人として見に行くでもなく、それを知ろうとする人もなかった。

私は友人が入舟にいたので手助けのつもりで行ったが、友人宅の石井仏具店の所で火事は止っていた。

火災は、下乳牛の農家から出火して、四ツ角を中心に片町は現在の近江屋の所で止って町の中心部はすべて焼け野原と化してしまった。

電柱も当時は全て木は柱であり倒れて、電線が十文字に地べたに落ちており、道路は足の踏み場もない程で歩行も困難であった。

最も困った事は、夜になると電気はなし、当時はローソクにたよる他なかった。

食糧も女の人は苦労したようだった、数日後全国各地からよせられた慰問袋が、各家庭へ届けられ暖かい支援は、感謝にたえないものであった。

私のところへは、岩手県の方から届いた。

一方、河川の水については、どこの山々もいたる所でがけ崩れが起きて水が半月以上も濁り、ウナギなどが背を出して浮いており、私は五、六匹取ったことを記憶している。

この日､秦野町では青年団が､東京の宮城に四十名ほど上京していて大地震となり、帰路は交通機関が止まり徒歩となったが、道路はひび割れ、橋という橋はすべて落ちており、二、三日後にようやく帰郷した。

私の家でも父親が東京へ地震の前日より大正博覧会に出かけていました。家で造った傘を出品してあったからですが、その時、秦野町では五人が出品し、当日が表彰式の日であった、表彰式がすんだ後で地震に会い五人は地震から三日目の朝方、食べる物もなく命からがら帰って来ましたが、表彰状はかたく握って来たとのことです。

その五人は、下曽屋の赤坂正吉さん、入舟の髙橋仙太郎さんのお父さん、平沢峯の青木春吉さん、今の駅前天狗寿しのお父さん等であった。

又横浜、東京の大火では大きな二次災害が発生した。横浜の正金銀行は当時火災に絶対安心だとされていた。

火災が発生すると、建物の内側を水が回転する仕組みになっているので焼けないと

横浜に住む人は知っていたので、正金銀行へたくさんの人が逃げこんだ。しかし地震で水道は破壊され水が出ず、丸焼けとなり、逃げこんだ人が焼死するにいたった。

一方東京では、何百ヶ所からも出火のため東京のほとんどが焼け野原と化した。特に本所被服廠は物すごく大きな敷地であったため被災者が逃げこんだが、多数の人が荷物を持ち込んだため、その荷物に火がつき、これが致命傷となり三万三千人が焼死した。

大地震には火災がつきものです。もし大地震が来たら一番関心を持っていただくことは火の始末です。

行政機関の手は三日間位廻らないと思うので、自分の事は自分で守る心構えが必要である。

日頃より避難品として、食糧（乾パン、かんずめ）懐中電灯又はローソク、ラジオ、医薬品、サラシ、ホータイ類、水の確保が必要であろう。

今日は、化学の発達でいたる所に危険性があり大地震の際は以前より被害は先ず甚大となると考えざるを得ない。

焼けトタンが空を舞う

（栄　町）　普　川　富美子

今の本町小学校から帰って昼ごはんを食べようと思った時、グラグラときた。

柱につかまっていたが、その柱が抜けて外へほうりだされた。

外は地面が口をあけるように割れていた。

前の呉服屋が、外にタタミを敷いてくれたのでその上にいた。しかし、そのうちに火の手があがり、そこにじっとしていることができなくなり、必死で茶碗森（現在の栄町五番地付近）に逃げた。

家は、秦野織物の仲買いと質屋をやっており父母と十四歳の私の三人家族であった。

家は、輸出用の秦野ちぢみと、農家の人が使う秦野木綿を仕入れていたが、これをやっとのことで茶碗森に運んだ。

父は、お金を持たず位はいを持って逃げだし、後で祖母にしかられていた。しかし、欲は二の次だった。

茶碗森も火に囲まれた。廻りはぐるりと焼け、頭に火の粉が落ちてきた。

たつ巻きが起き空を焼けトタンが舞って、目の前で教会が倒れ、燃えほうだい燃えた。

火が消えてからはバラック生活が始まった。

秦野の場合は、近隣にない自慢の水道があったが破裂してしまい使えなくなってしまった。

朝晩はやむ得ず破裂して吹きだしている所までくみ取りに行った。

しばらくすると役所やあちらこちらから慰問品として食糧が届いた。

なくて困ったのは、マッチとローソクだった、幸い自分の家から火を出さなかったが、あれでは火を消す間もなかった。

初めての体験で何が何んだかわからなくなって、怖さが先きにたって理屈など通用しないものだ。

木綿が売れて経済的な苦労はなかったが、三ヶ月位は、たいへんであった。

この前の地震のときは、火を消さずに飛び出て後でビックリして消したが、よほどの訓練をしないと本能的に飛びだしてしまうようだ。

地震で湖が誕生

（今　泉）　栗　原　友　次

（一）地震による被害の状況

ア、関東大震災には今泉字上市木、下後久保畑及山林約二町歩が崩壊した。震生湖は、現在、入り口になっている高い道路の南側が、地震の時突然南方に飛びだして谷川をせき止めて出来た湖で、字の如く地震で生まれた湖です。その時、この道路を荷車をひいて西へ向って通られた人があり通り越して、二百メートル位後の方で崩壊したので、幸いにもその人は難を逃れることが出来たということです。数日後、これを見に行きましたが、がけが急に切り立っていて恐しくなり近寄れずにいました。こゝは、現在ゴルフ練習場になっている場所です。

もう一つ大きな出来事は、平沢峯坂の道路の崩壊のため、小学生二名が埋没してしまったことです。南地区各種団体その他多くの人々が、埋まった道路を元のところまで掘返したが、行方不明のままであり今も見つかっておりません。

又、秦野地方全域にわたり各所で道路、石垣の崩壊や田畑の破損等が多く、なかでも家屋は当時かやぶき屋根で重かったため倒壊が多く、逃げ遅れて死者、負傷者が出ました。部落内でも母屋や物置等に全壊、半壊の被害がたくさん出ました。私はその時、庭の中程に居ましたが、ゴーという音と共に倒されてしまい近所の倉庫、長屋門の大きな物置が前の道路に倒れるのを見ていました。私の家でも母屋、物置一棟は半

壊、物置二棟は全壊してしまった。隣の馬小屋が倒れて、その中で馬が生きているらしいと言うので屋根を切開して助け出した。幸いにも馬は無事だった。
イ、火　災
　火災は本町だった一箇所から発生したものが、それを消し止める事が出来ず、広範囲の大火になってしまいました。余震が絶えず続いており、各家庭での被害も大きく、身の危険と重なりこのような二次災害となってしまったようです。
　（二）地震発生後の状況
ア、避難状況…避難は各家庭で行ったようです。
イ、困ったもの…井戸水が使用出来なくなったこと。
ウ、復旧状況…復旧については日が経つにつれて、地区の人たちが互いに協力し合い、道路の修繕や倒壊しかけた家を直してまわりました。
　（三）地震予知の状況
ア、地震前の気象状況…当日午前中は大雨であったが、発生時には雨は止んでおり、温度は普通であった。
イ、動物植物…子牛を飼っていたが変化は見られなかった。むしろ発生後は実におとなしく人をこいしがり綱がなくても静かだった。農作物も変化はなかった。
　備考…現在までに私の知る限りにおいての地震は、大正十二年九月一日の次に、大正十三年一月十五日朝方のが二番目でした。

池の水が八尺もはねあがり

（大秦町）　高　橋　義　三

　関東大震災は、私が平塚農業高等学校を卒業した年の９月１日、午前十一時五十八分でございました。その日は、非常に蒸し暑く、なんとなく、なにか起こるような予感がいたしました。当日、正午近く、どうどうと、するような音が聞えると同時に、一瞬にして、寿徳寺境内墓地を取巻く石垣や、天然の畦畔は全部崩れてしまい私の庭先まで、その石が転って一杯になってしまいました。その時、寿徳寺百番の観音堂内において小田急電鉄軌道用地譲渡要請に対する地権者協議会が、開催されており、会社側より、佐藤磯太郎氏、仲介川口知白老師、地権者側は、私の祖父高橋常吉外十八名が出席し、協議の最中でした。観音堂は倒壊し、中にいた人達は、南側の寿池に面する五十尺位の畦畔が、池にずりおちた中間の所に逃げだしておりました。私は、祖父を迎えに行き、自宅前の桑畑に避難いたしました。当時、寿池は、面積が百五十坪

あり、四方畦畔にかこまれておりましたが、地震発生と同時に四方の畦畔が、一度にずりおちた関係で、寿池中心部の水が、八尺程はね上った事実を、目撃した人もありました。当時この寿池の湧水は、大正四年十一月十日の、御大典事業として、尾尻水道組合を設立し、新田町、臼井戸町の一部の水源として給水をいたしておりましたが、給水管が土管であったため、全部損傷し、使用不能になりました。又、当時の尾尻部落は、全部が農家で四十二戸のうち倒壊九戸、半壊十二戸、それ以外の家は、全部ゆがんでしまい、死亡したものは五人でした。今日では、新田町三百二十四戸、臼井戸町四百二十八戸、上方町二百四十八戸、合計一千戸と、大変貌をとげています。

一方、本町では、現在の栄町の三角豆腐店の上方より火災が発生いたしましたが、本町水道も土管のため、全壊してしまい消火用水はおろか、飲料水にも、こと欠く始末でございました。火事は、一日一晩焼け続け、現在の“ますや”陶器店の近所で火災が止った事を記憶いたしております。その当時幸いにも只今の、臼井戸町の弘法水は、少しの変化もなく、清い水を湧出しておりましたので、地元部落の人は、申すまでもなく、本町から飲料水汲み取りのため、両手に手桶、バケツ、ヤカン等を下げて水無川を渡り、毎日列をなして、飲料水確保のため殺到していました。当時の水無川は、完全な堤防もなく、両岸部落の消防隊、住民がお互いに、川倉を出しあい、川砂利を盛りあげて、水防に当っておりました。一方、耕地は、私共部落の南方に多く、畑の畦畔は、全部畦がずりおち原形をとどめない状態になってしまいました。道路の損傷も甚だしく、場所によっては、膝まで没する程度の亀裂を生じた所もありました。里道等は、地震発生後一ヶ月にして人だけ通れる程度になり、三ヶ月を経てようやく昔の荷車が通れる程度に復旧いたしました。（この様に手間どったことは、住民が自宅の復興に従事しながら、その合い間に、道路復旧作業をしたからです。）尚、地震発生と同時に昔の峯坂、現在の市道七十四号線が崩壊し、小原部落から南小学校へ通う女生徒が、二人生き埋めになったので、私も青年団員として、他の団体の方と、二日間発掘作業に奉仕いたしましたが、遺体は、ついに見当らず、今日に至っております。ご遺族にとっては、誠にお気の毒であり、人の御霊に対し、御冥福を祈っております。余談になりますが、先程申し上げた小田急軌道用地買収交渉につきましては、地権者との話合いが、二年間、中断いたしておりましたが、大正十四年末に再開されました。私宅の軌道敷買収用地は、竹林でございました。そのほか近所の方に、宅地の替地として坪七円で、提供いたしました。小田急電鉄軌道用地も、各地権者の協力により、昭和二年四月一日、開通の運びに相成り、初代の大秦野駅長には、私の先輩であり、後に県会議員を三期務められた、伊勢原町（現在の伊勢原市）田中の加藤重忠氏が就任され、私は、日頃親しく交際いたしておりましたので加藤さんの、御都合のよろし

い時に、大秦野駅を訪れ、世間話をしたことが思い出されます。

関東大震災は、被害対象区域が広範囲であったこと、救急業務をつかさどる医者も被害者であったこと、他人も、自分も、同時に被害を受けたことにより、防災救助等に対する協力体制が、少なかったように私は受け止めました。又、近所の人々が、民家の倒壊により外傷を受けたり、出産後の婦人の看護等に大変苦労されたことが、脳裏に深く残っております。これに対処するため、各町内におかれては、自主防災体制を確立して、地域のリーダーのもとに、正しい情報の伝達、初期消火、自分の血液型の確認、防災袋の確保等をされ、訓練の積み重ねによって活動の万全を図り、一円融合のもと、住民の友愛と社会連帯感意識の高揚に専念されることを強く要望いたしまして筆をとどめます。

被害は地盤によって

（西大竹）　高　橋　俊　治

大震災が起きたのは、私が二十三才の時でした、父の初七日も終えたあくる日の悲しみも覚めやらぬ日の出来事でした。大正十二年は、いつもの年に比べ照りの多い好天の続く年だったと記憶しています。九月一日の前日は雨降りで、当日は、朝から雨も上がり、良い天気となりました。私は、朝から煙草の肥料の注文の件で、寄り合いのため近くの役員宅へ行っていた時のことでした。寄り合いも終わろうとしていたところ、いきなり、ぐらぐらと地震がやって来ました。部屋には二十人程が、囲炉裏を囲んで集まっていましたが、私は中でも一番の年若でしたので、とっさに台所へ這いずるように向かい、大揺れが、おさまったのを見て、バケツの水で、囲炉裏の火を消し、戸外に避難しました。自宅へ戻ると隣近所と同様に母屋は潰れ傾き、その後の余震で中へ入ることができませんでした。庭の片隅にあった土蔵の倉は、かろうじて持ちこたえたものの、翌年一月十五日の地震で全壊してしまいました。大震災では、地盤の関係か、地震の波の方向によるものか分かりませんが、家が潰れるなど被害を受けたところと、家がそのまま残った地域がはっきり分かれました。

自宅より東側の地域がほとんど被害がなかったのに比べ、自宅の周辺は、ほとんど被害を受けました。

妻はこの時、畑に野菜を採りにいっていたそうで、その模様を後から聞きました。妻は当時二才の子供を畑の傍の竹やぶで遊ばせて自分は畑で茄子をもいでいた時に地震に会い大きな揺れで、立つこともできず、伏せたままで、揺れのおさまるのを待っ

たそうです。立ち上がって見ると、畑には、数十メートルに渡り、二本ほどの地割れが、数十センチの深さで、できていました。また、畑からは、まわりの家屋が潰れ、砂ぼこりが大煙のように立ち上がっている光景が見えたそうです。

大揺れもおさまり竹やぶの子供のところへ行ってみますと子供は、かすり傷もなく無事でした。やっと、妻とも再会して、つかの間すぐ裏の家で、足が悪く寝ていた七十才になる中気のおじいさんが、家が潰れ、とり残されたということで、救助に向かいました。行って見ると、完全に潰れていたため、入り口もなく、のこぎり、鎌、なわを使い中へ、入って見ますと、おじいさんは、寝たまま梁の下敷になっており、虫の息でありました。やっとの思いで救出しましたが、数時間で、なくなられてしまいました。その後も余震が続く中、私たちは、母屋が建て直し出来るまで、竹やぶの脇にあった粗朶置の小屋に、蚊帳を吊り、むしろを敷き生活しました。食べ物もやはり苦労いたしました。味噌、醤油は自宅で造っていたので、不自由しなかったものの、肝心の主食の玄米、小麦は、近くの水車が地震で壊れ使えなくなってしまい精米することが出来なかったので苦労しました。また、飲料水は、堀井戸があったので、一部補修をして使うことができ、不自由はしませんでした。近くの家では、井戸が潰れて、もらい水に来た家が、多くありました。母屋も、その年の十一月には、静岡の仕事師が、頼めたので、十二月いっぱいで、家も起き上がり、気分も新たに正月を向かえることができました。

日常の備え

（名古木）　重　原　康　夫

私は関東大震災に長野県松本市で、未だ二才にもならない時に遭遇しました。幼年の頃、よく親に聞かされた話ですが、丁度家族全員で昼食をしていた時、ぐらぐらと揺れ出し、多分現代語で言う、震度六位ではなかったろうかと思う。田舎の事だから皆素足で何も身にまとわずに庭先へ飛び出してしまったらしい。今ではこの様な時、まわりに危険なものが一杯あるので足の裏と、手と頭を一番先に怪我をするのではないのかと思う。このため私は、運動靴、戦中の防空ずきん、軍手を日常寝室の壁にぶら下げており、まず三秒位でこの三点を身につけ、怪我防止の身がまえをしている。次に持つものの用意や、逃げる手だてをするようにしています。皆さんいかがでしょうか。これを私は防災の備えとして準備しています。

平らな畑が二メートル以上の凹凸に

（名古木）　小　泉　武　男

大正十二年八月中旬頃より異常な晴天が続き、畑はコチコチで中耕が出来ず、農家では、困っていたところが、三十一日夜からの大雨で畑は湿り、九月一日朝方には雨もやんだ。

当時十六才の私は、父親に連れられ近くの高台にある（現在の温室団地）蕎麦畑の中耕で、鍬を上下していた午前十一時五十四分十八秒の一刹那、未曽有の大地震、平らな畑が二メートル以上の凹凸になり正に埋没しそうになった。歩けないで土の上を泳いでいた。

名古木中から旋風の様な土煙りが上り、続いて木造家屋の倒壊音が響いた。「さあ大変！」と父親と共に、立ちつ転びつの連続で、家に帰った。

傾斜地造成で、明治四十年に建てられた我が家は壊れなかったが、軒下から倒壊して、十メートルもあった庭がない。ダラダラの斜面となっていてまたビックリ。同夜から三日間隣三軒一ヶ所の竹藪の中で夜を明した。町の火災は消えてなかった。

九月二日家屋倒壊による町内死者の三名を青年団に加入したばかりの私も出動して、筵にくるんで仮埋葬した。しばらくすると飛行機が飛来し一同手をたたいて喜こんだ。しかし余震はやまず一時間位に大揺れが続いた。

九月三日「地球がくずれる」、「これ以上の地震が来る」などの情報が伝わり心配したが「自分を守るのは自分より外にない。町内を守るのは町内の者だ。」と当時のお年寄りが力説していられたことも思い出の一つです。

九月四日、秦野町（現在の本町）の大火は未だくすぶっていました。竹藪同居住いの三家族もそれぞれぐらぐらの我が家にもどり野外炊事をした。

九月五日、名古木玉伝寺にて裏山の崩れで埋没した二人を掘り出しに行く。

関東大震災は、震源地が丹沢山と言われ、五分の一ぐらいが崩れて裸山となる。また南秦野今泉の高台が陥落して湖水が出来た。ここが震源地とも言われた。誰がいつ名をつけたか、今の震生湖です。

震災後、地震が産んだか誰が言い出したか「此の際」と言う流行言葉、どこに行っても「此の際」と話し出され聞かされた。

此の際そんな事言ったって。此の際昼寝なんて。此の際貧乏人は家が建たない。此の際小学校を一番先に建てるべきだ。此の際は臼で米搗き、麦搗きやらなけりゃー。何の話し出しも「此の際」の発音流行語も、四、五年で消えてなくなる。日記帳より想い出の一こまです。

柿の木の枝が地につく程の大揺れ

（西田原）　牧　嶋　芳　男

地震、雷、火事、親父と言う言葉を子供の時からよく聞かされたものですが、本当に地震の恐ろしさは、あれから五十六年もの月日が経過した今日でも、今尚頭の片隅にやきついてはなれません。

大正十二年九月一日ちょうど小学校の二学期の始業登校日でした。私は学校から帰宅して友人達と、二、三人で裏山の段々畑のままに甘柿の大木があったので、それをとりに行きました。皆んなで木に登り、一、二個取った時、「ゴォー」と言う音と共に、木の枝が地面につくかと思われるくらい大きな地震で横揺れが起こり、そのうち上下に「ドド」と言う音と共に「ドスンドスン」と二、三回。何がなんだかわからず、目をすえてよく見ると、あたり一面の砂ぼこりでした。少したってよく見るとみんなまだ木に登っており、「早く降りろ」と言っても余震でぐらぐら木が揺れているのでなかなか下の枝に足がかからず、しばらく木に登ったままであった。この間、木の上から見た畑はうねったり、ところどころ亀裂が出来て口を、あけたりしめたりしているように見えた。しばらくすると少し揺れが小さくなったので、下にいる者から順に降り、畑に出ました。ところが来る時に登って来た道がなくなって帰る道がない。よく見ると、道から下側の畑や竹藪が百メートル位先に流されたような形で、一面の赤土砂が露出して、ものすごい山津波の足跡の姿でした。

帰る道がないので、畑続きに牧島一平さんの庭に降りた時、次男の梅男さんが鎌を持って、ペチャンコに前のめりにつぶされた母屋の草屋根をこわしており、「母と妹が中にいるので救出するんだ」と云っておりましたが、グラグラと次から次と大揺がくるので、こわくて夢中で家に帰りました。吾が家は前のめりに倒れ、庭は子供の足が入るくらいの亀裂が沢山出来ていて、あぶなくて歩けないくらいでした。

家の者が見当らないので困っていましたら、母が裏の方で私を呼ぶ声がしたので行ってみると、裏の家の堆肥を積み上げた上にむしろを敷いて、その上に近所の者と一緒に避難していました。そのうち近所の方が「一平さんともう一軒へ救出に行ってくれ」とどなっているのが聞えました。

大人達の話では母屋が倒壊して中に、三、四人いるので早く救出しないと生命が危険だと言うのでした。幸い命には別状なく夕方までに全員救出されました。

この山津波に依る倒壊、母屋二、物置二、ガケ崩れに依る倒壊、母屋一、地震に依る倒壊母屋二、半壊家屋多数、以上のような大きな被害が当池端に出ましたが、死者や火災が発生しなかったのが不幸中の幸でした。

空は日食のように暗かった

（名古木）小　泉　耕　三

私の現住所は名古木ですが、東田原下宿で育ったので、関東大震災の記憶は東田原の記憶になります。震災のあった前の晩まで雨が降っていて、その日は昼前から快晴になり、非常に蒸し暑かった様に思います。

私が十七才の時で、親の言い付けで東田原の井之城の水車へ行った帰り道のことでした。その水車は小沢信さんと言って、谷底にあり精米精麦をしておりました。用達を済ませて帰る途中の坂道で地震にあったのです。地震が起きると同時に体は倒れてしまい、這って一人で「あーあー」騒ぎながらいるのがやっとでした。その内に少し地震が弱くなったので、下駄を手に持ち、素足で上の平地まで駆け上がった時は、日食でもあるかのように、空全体が暗くなって無気味な感じがいたしました。当時、各家屋が土かべのために、ほこりが舞い上がって暗くなったのだと、後になって考えました。

駆け足で家に帰ったのですが、畦畔は崩れ、少し低い道は、両方から崩れて道はなく、畑の中をまっすぐ走ったのですが、井の城部落に火災が起きていましたし、それを過ぎると、倒れた家の中から草屋の屋根をこわして、病人を出して居られた家もありました。ようやく家に着くと、住宅、物置は倒れ、隣近所の家も全壊や半壊で実に凄惨な有様でした。そのうち、前の家のおば様が家から前に出た子供がいないと騒がれたので、近所の人達みんなでさがしてみると、戸袋の下敷きになってかわいそうにも幼い命をなくしていました。

その後も西の方から地鳴りがすると、次々と余震があり、家は危険ですので、庭の広場へ丸太を立て、周りを弧(こも)で囲い、屋根はトタンで造ったほったて小屋で炊事をし、生活を始めました。農作物は荒れほうだい、甘藷も里芋も全部肩を出してしまいました。電気を使った精米所や水車は全部こわれてしまい、麦や米はあっても精米や精麦が出来ないので非常に困りました。食料と言えば甘藷、里芋、小豆、ささぎを多く食べたように記憶しています。

その後は、大雨が続いたので、山崩れやがけ崩れの被害は大変なものでした。余震が大分収まってきますと、全部倒れた家は取り壊しますが、どうやら起こして住める家は、金でこだけで起こし、木のすじかいを打ちつけて住むのに間に合わせました。道具といえば、金でこしかなく、職人も頼めませんので、近所隣り手伝い合って行いました。

電話や交通機関も途絶えてしまったのですから、東京や横浜は全部焼け野原になっ

てしまったとか。

農家は家屋敷の復旧も大変なものでしたが、それにも増して田畑の復旧は、なおさらのことでした。秋の収穫から、大麦、小麦の作付けをする時期のため、畦畔修理は当然の事、他人と境のわからなくなった所も出来てしまったので、この整理など実に大変であったように記憶しております。又、道路の修復が収穫作付けに必要でしたので、部落の共同作業も中々大変で、地震の傷跡は何年も続きました。再度、大地震など起らないよう祈るものです。

山が崩れる様な音が

（西田原）　窪　島　貞　次

その日は、ちょうど母と二人で、現在のカントリーがある場所に、当時、桑畑があったので桑摘みに、行っていました。ちょうど十二時頃（当時は、時計も持ち歩けなかった。）山が崩れる様な音と同時に地面が揺れ、立っていられず、地面に転がってしまいました。しばらくの間は、その様な状態が続きましたが、だんだん時間がたつにつれ地震が弱く成ったので、桑摘みの籠はそのままにして、空身で母と二人で家の方に向かって歩いて来ました。ところが家の方は、激しい音と共に、砂煙が上がっていました。それは壁つちが落ちていたのでした。地震が弱く成るのをみはからって、家まで進んで来ました。全壊、半壊の家々を見ながら、自宅にたどりつくと、母屋は全壊に近く、物置きは軽い半壊で、どうやらこゝにすめそうでしたが、余震が来てすんでいられそうになく、葉たばこの物干し竿を四ツ柱にして囲い、夜は当分の間、そこに住んでいた。

町の火災の時は、見舞いにも行く事も出来なかった。

一番困まったのは食べ物で、米は水車でひいていましたが、水車が全壊で米もひけませんでした。二俵の麦にあづきを混ぜ、にぎりめしにして食べていました。モチをつく臼と杵でモチ米を一日搗いていた。そうしたら、半搗から七分搗になり、それをおこわにして食べたら、大変おいしく食べられました。水は、井戸だったので、どうにか困らずにすみました。

又、蚕をかっていても、どうすることも出来ず、蚕をすててしまいました。

地震の被害はとてもひどく、特に、大雨が降った後に地震があったので、山津波が起こり、菩提から羽根あたりまでにかけ、上の方は、家屋が流され川原に成った所もありました。その山津波の泥が、葛葉川に落ちて堤防が欠壊し、人家の方へ、大水が

流れ、現在の日立の寮あたりが川に成ってしまった。

その時、川口せいじ郎君の家が、水びたしになり、村の人達が出て、防いだ記憶がある。

家屋の全壊も多く、梁が落ちて死んだ人の惨事もありました。火災は、東田原の一件（古谷ノリさん）の母屋が焼けただけで、西田原ではありませんでした。

余震のため、家をおこす事も出来なかったので、次の年の三月～四月に、静岡の方から専門家が来て、家をおこす様な状態であり、それまで仮家に住んでいました。

家族は、幸い災害もなく済みました。

南矢名は全壊半壊が多数あった

（南矢名）　鈴　木　角　蔵
小　沢　ヨ　シ

小沢　八月中は晴れの日が多かったが、三十一日の夜から大雨になり、これはいいおしめりだと思っていた。

地震が起きたときは、どこで何をしていたか。

鈴木　家の近くにいたが、一日は仕事が休みだったので、チョットしゃれて若い者と出かけようと思っていたが､突然地鳴りがして地面が震えだしあわてて裏に行ったが､とにかく屋根の草ぶきが落ちてくるし､台所の瓦が崩れてしまうし大変な様子でした。父も母も家の中にいたが、父は外に出たが母は出ることが出来なかった。そのうち家が倒れ始めた。母は倒れた柱の間にはさまれて動くことが出来なかった。そのうち近所の人が来て、鋸とナタで柱を切って母を助け出してくれた。その時ほど、近所どうしの助け合いが大切なものだと思った時はなかった。

地震はどのくらい揺れていたか。

鈴木　なにしろ時計は止まってしまったし、なにがなんだかわからなかった。

小沢　これはいったい何が起ったんだろうと思っているうちに、ころげ立ちあがることさえ出来なかった。近所の家は半壊、全壊しものすごい光景だった。近所の井戸の水はかれてしまったが、どういう訳か、私の家の井戸はどんどん水が増していった。泥水であったが澄まして使った。

余震はどうだったか。

小沢　一ヶ月程度続いたが、三～四日すると揺れる間隔も長くなったようだ。

地震で困ったことは。

小沢　私の家はたばこを作っていたが、みなダメになった。棚の上の食器は、みなダメになった。もちろん食料も一番困った。

鈴木　やっぱり一番困ったのは食料ですね。小麦を食べて過しました。アメリカから救援物資が届いた記憶もあります。が、それはもっとずっと後になってからですね。関西からも物資が届けられましたね。

被害状況はどうか。

小沢　一人戸袋の下敷で圧死しました。その他家屋の半壊、全壊、がけ崩れで家の前に土砂が流れとにかくものすごかった。大根では火災はなかったように思います。昔の農家は十一時お昼でしたからそのためでもあったのでしょうかね。

地震が終ってからの気候の様子は。

鈴木　例年どおりで変化はなかったように思う。

小沢　米はずい分穫れたように思う。

その後の復旧状況は。

鈴木　倒れた家の柱などを使って建て直した。

経験者としての日頃の心構えは。

小沢　やはり火の始末ですね。

鈴木　地盤がかたければそれほど倒れるものではないですね。地盤によってずい分被害が違いますね。

とにかく避難出来る場所があればするにこしたことはないと思いますね。

何かが光った、そして畑が

（鶴　巻）　臼　井　四　郎

大正十二年九月一日、その頃私の家では十一時が昼食でした。足を洗って我が家の前通りで向いを見たら、約百メートル先の畑が白煙で、四、五尺上がっているように見えました。それは、午前中に雨が降ったので、水蒸気かと思っていましたが、何かが非常に光るような天気でした。家に戻り昼食昼休みをしていた十二時ごろでした。地震だと驚いて目をさますと、部屋の指物が抜けて家が今にも壊れるかと思い、急いで起き上がった時には元に戻っていました。その時、箪笥の上にあった「はさみ箱」が三回転がって落ちてきました。その後、隣近所の人達とその時の話をしましたが、父もあの光を見ており、なんと恐ろしい光だろうと言っておりました。

私の家の近くに極楽寺と言う寺がありますが、住職が先生で、当日は始業式のため

吉沢小学校へ行っておられましたが、その留守に庫裏で、母、妻、子供の三人を亡くされました。

その当時、新聞では「ナマズが寝返りをうった」などと、今では考えられないデタラメを言っておりました。

地震は九月一日より翌年の一月二十八日ぐらいまで続きました。その中でも一月十五日朝五時五十分頃の地震は、ものすごく、井戸水を汲んで、顔を洗おうとしていたが、バケツごところがり出してしまいました。

昔から地震、カミナリ、火事、親父と地震は一番恐ろしいものとされていました。突然何の前ぶれもなく起るからです。又これに伴う二次災害としての火災は、家の連なっている所では最も恐ろしいので、私は日頃から火の元に気をつけること、食糧の準備に心がけています。

天気が続き、短時間の雨が降った後、光が銀色に輝くような時はびっくりしてしまうことがあります。

地震のとき湿っぽい土地は弱いが、堅い土地に建っている家は、昔と違い建築方法が良くなっているから簡単には壊れないと思うが注意は必要だと思います。

私の家の近辺では、以前、毎月一日、十五日の朝に小豆のご飯を神様に上げ、身体、家族一同が丈夫であるようにとお祈りするとともに、災害を思い出し、心がまえを新たにしました。又、隣組では、関東大震災以後、「地震講」を設立し、二十年間九月一日に隣近所で集まり、午前十二時に黙祷を捧げておりました。この費用は縄一輪をかけておりましたが今ではやっておりません。

この様な当時を思い出す機会も年々なくなってきましたが、地震は必ず起きます。

岩の上にある家は大丈夫だった

（松原町）　岩　本　善　江

その年は、例年より雨が多く暑かった。地震の前にはどしゃ降りがあり、それがあがってしばらくすると普通の地震とは違う、ドーンという地響きがあった。もちろん、その瞬間は立っていられない、周囲の家が倒れ、ものすごい地震でした。柱のたくさんあるところは無事で、ストレートの家も平気だった。館山では火災はなかったが、隣りの町（船方）は、石油基地のためか、ひどい災害でした。館山から、東海地方まで、かなりの被害にみまわれた。震災後の余震もかなり強いもので、四～五位の震度で一階は潰れたが二階は残った。昔の家は土壁で、大きな梁があり、これが落ちて、

その下敷きになった人も多かった。
当時、北条町（現在、館山）は、住宅地になっており、別荘地のような感じであった。海から一里ぐらい離れると、被害は少なく、海岸沿いの地域が大きかった。
山の近くでも怖いが、内陸地ならば、さほど被害は大きくならないと思う。いざというとき、米があれば安心です。もちろん水があればのことですが、缶詰などは面倒である。とにかく、米を持ち出すことが一番です。当時は、梅干とからっきょうとかの保存があったが、やはりその後の供給が心配であった。
館山では井戸水での伝染病もなく、岩の上に立った家はすべて無事で、さほど被害はなかった。更に地下があると大変良いと思います。
地震の次の朝の太陽は真赤だった。

四ツ角に酒ダルで給水

（並木町）　久保寺　と　め

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、私の終生忘れる事のできない思い出。
その時私は十五歳でしたので、たいていの事は覚えています。私は秦野町の乳牛、今の文京町で生まれました。
丁度食事の頃でしたが、たいていの人が昼食は食べていませんでした。乳牛の玉川と言う豆腐屋の裏に農家があり、そこのおばさんが一人で昼の仕度をしておられましたが、その家ではイロリの上にたばこを吊るしてあり、たばこがイロリの上におちて火事になったと言うことです。このため、秦野町の四ツ角はほとんど、やけ野原になってしまいました。とにかく、水道や川はメチャメチャになって、道路は地面が二つにわれて歩けないようでした。食べ物も水もなく、皆とほうにくれてしまいました。私の家や近所の家もたいていがつぶれてしまい、近くの空地に戸板とタタミを持って行き皆でバラックを建てました。夜はローソクをつけていましたがそのローソクも店になくなり、暗い夜を過ごしました。又、米をとぐにも水はなく、風呂の水でご飯を炊きました。三日目になって役場から玄米のおにぎりが届きましたが、塩もなくおかずになるものはありませんでしたが、私の母親は昔の人で何時も梅干、たくあんを沢山つけておきましたので、近所の人達に配ってあげました。
さて、そこで考える事は、テレビ・ラジオでは、かんぱん、缶詰めなど備えるようにと言っておりますが、一日か二日はよいでしょうが、それでは子供達の腹が持ちません。そこで長く置ける米、梅、たくあんのような悪くならないものを保存したいと

思います。今の若い人達はもう少し考えて欲しいものです。

またあの地震の時、火事さえ出さなければ良かったとつくづく思われます。でも、秦野は水の町ですので、役場の人達が大きな酒樽を四ツ角の真中へすえ、水元から太い竹で何本もつなぎ合わせ、その樽に入れてくれたので本当に助かりました。その時の役場の人々、その他の人々は大変な働きでした。今さらのように頭が下がります。

近くの山が赤裸に

（沼代新町）　大　森　修　蔵

関東大震災を回顧すれば地震といえば、「ソレ」という言葉をかけた位です。

それは大正十二年九月一日午前十一時五十八分のことです。私は菖蒲の親戚のお葬式に、朝早くから母と八カ月の赤子を残して出かけて行きました。前夜の大雨で、四十八瀬川は大変濁っていて、私たちは親戚の膳の前で食事をしようとすると、「地震だ。」その時ばかりは我も彼もありません。私も他人どころではありません。両親や妻子の心配。我家隣近所の様子。私は失礼して我家に急ぐことになりました。しかし、外に出ても木などにつかまらなくては倒れてしまいます。皆、夢中で絶え間なくくる余震に怯え、近くの山を見ると、赤裸となり所々崩れていて何とも恐ろしい風景でした。幸い我家では、両親、子供は傷も無く、家は半壊ですみました。隣近所も大騒ぎでした。我家の物置は二百年以上もたっていますが、柱や梁がしっかりしていたので少しも動きませんでした。ですからそこに寝ることにしました。またこの日、私の生家の父は、私の家に立寄りながらお葬式に見えるのでしたが、丁度私の家まで来た時地震にあったようでした。時に秦野本町を見ると、現在の上宿八幡山方面より出火、玉川すし亭附近からカブト湯の辺、四ツ角あたりから元警察署までの大火で、空が赤々とし父は驚いて実家の名古木まで帰ったようです。

ところが、明けた二日の午前十時、私の生家の甥が顔を傷だらけにして「名古木の自分の家はもとより附近一帯は全壊で、おばあちゃんは倒れた際、はりにうたれ大怪我をしたすぐ来てくれ。」と言うのです。とりあえず手拭二十本と米一斗、麦五升を持って一里半もある道を行ったところ、驚いたことにあらゆる立派な家が全壊していました。生家の隣の薬師堂では、会合があって、外に出るや庭が破れて、八人も死者を出したということです。私の持っていった食物で五、六家族が助かったとききました。

東京、横浜方面でも大火があり、刑務所を開放したので一時は大騒ぎであったようです。その地震の程度は想像がつきません。なにしろ、最初は五分、十分、十五分間

隔で余震があったのは驚く外はありません。当時、水道がなく井戸水も水源のよい私宅と隣の家で浚ぎました。このように、地震によりしばらくの間不自由な生活をしました。

地震対策として浮びましたことを挙げますと、家庭で大切なもの、書類、金銭をすぐ運び出せるよう誰でも知っている所へ置くこと。それから地震の時いざというときに家からとび出せる場所を覚えておくこと。火災が起らぬよう火元の点検をすること。逃げ場所は平地がよい。藪があればなおよい。飲料水、食物の用意も心がけるようにする。

山津波でドロの海

（千　村）　原　　峯　治

私は高等科二年（十五才）でした。あの日はちょうど土曜日でしたので、河原へ魚を捕りに出かけようと思い、一人で御飯を食べていました。

その時、突然上下の激しい揺れが襲って来て、台所の窓からドドッとドロの海が飛び込んで来ました。前日は大雨だったので裏山がゆるんでいたのだと思います。家の人は外へ仕事に出ていて、私は屋外へ逃げようとしても色々なものが頭へ落ちて来て危なくて出られず、座敷の柱にしがみついているのがやっとでした。家の前はもうドロの海で、そこへのまれ込んだおばあさんは、マキの木にしがみついたままどんどん流されながらも助かりました。庭の植木もそのドロと一緒に、下まで流されてしまいました。馬が小屋から出られず暴れて困っていますと、隣りのおやじさんがばくろうだったので、馬を前かけで目隠しして無事助け出してくれました。家族では死んだ者はいなかったが、上の家では、ペチャンコになって子供二人が死んでしまいました。夜になると裏の竹藪へ荷物を運びそこで過しました。

また、秦野の町が大火となり夜空がまっ赤になっていたのが今でも思い出されます。下宿の観音様、仲宿池の島の弁天様は火災よけの神様なので焼けなかったと聞いています。その後、余震が十日位も続き、次の年（大正十三年）一月十五日の余震は特に大きかったようです。こんな体験は、子供も孫も知らないので、もしも今度地震が来た場合、竹藪のある裏へ逃げろと教えています。

収穫した作物も一瞬のうちに灰に

（千　村）　奥　津　カ　ネ

私は当時十五、六才位だったと思います。住いは乳牛地区にありました。葉タバコの収穫をひと休みして、家の中で着物の整理をしていましたら、姉さんが「お昼ご飯よ！」と呼びに来てくれ、外へ出た途端グラグラと揺れが来ました。するとすぐに私の前の家から火の手が出ています。しかし、その家では、消火より葉タバコを運ぶ方に夢中で、そのうち火はどんどん燃え広がり、とうとう私の家も、そして四ツ角全体が丸焼けになってしまいました。秦野町（現在の本町）はそのころ地方都市では珍しく水道がひかれていましたが、地震のため水道管（当時は土管）が壊れて水が出なく消火に手間どっていたようです。火事はひどかったのですが、近所で死んだ人はいなかったようです。私の家はタバコを６反、小麦、大麦を約一町作っていまして、その作物を収穫して、検査日が九月二日と予定されていたのに、残念にも検査の前日に火事のため真黒に焼けてしまいました。残ったのは、落花生の三反位だったようです。家も農具も焼けてしまい、また余震も続いていたので、一週間位は野宿して、飯き出しのおにぎりを食べて過ごしました。

その後、遠くの知らない人々から、砂糖や着物の慰問品が届き助かりました。暖かな心づかいが嬉しく有難たかったものです。焼けあとに仮住いを建て、母や姉達と子守をしたり工場へ勤めたり、タバコ干しの手伝いをしたり苦労の連続でした。地震前は父も健在で、うるし問屋を営んでいましたので生活も楽でした。

地震後の苦労を思うと、先に亡くなった父の方が幸せだったと思います。十年後に念願の家を建てることがようやくできました。

北西方面より轟音が

（柳　川）　守　屋　芳　三

大正十二年九月一日は早朝より十時頃迄、夕立型の大雨が降り、その後カラリと晴れ、気温も三十度を越えた高温の残暑であった。その年の夏の天候は、平年より気温が高く、時々、雷雨夕立型の順調な天候で農作物には至極良い状況にあった。秦野の農業の主作は、たばこ、落花生で、私の生家でも六〇アール程純秦野葉の耕作をしており、九月一日には収穫乾燥も九十五パーセント終わっていた。この時私の家では、たばこの干し上がり状況が良く、納付結果も最上で秦野管内の優秀賞を受けた。

農村では当時一日、十五日、二十八日は若者の定休と慣習で定められていたが、一日は早朝より十時頃まで大雨で、各家庭も外出する人が少なかった。私は昼食を十一時三〇分頃すませ、暑いので横になり自宅で一休みしていた。

この年は年始めより総じて天候順調で、全般に農作型で異変でもありはしないかと年長の人達が語りつつあった。一日の午前十一時五十八分を時計の針がさした時、北西方面より轟音がきこえ、二、三秒間普通の地震が起り、順次上下動となり大きくなる気配を感じ、瞬間「これは大地震だ。」、家がたおれると感じて外に飛び出た時、すでに地上の大木、建物が大嵐の様な揺れ方をし、私は庭にたばこを干す柱が馬をつなぐため一本残されていたので、それにしがみつきましたが、丁度船をこぐ様な状態であった。住宅の附近の大木が根本から三〇度前後の角度で揺れ、近隣より聞こえる人の呼び声、家屋のきしむ音、壁土の落下する砂煙り等、言葉にならない凄惨な様子でありました。姉が幼子をだき、戸外に出ようと入口の敷居につかまったまゝ出る事が出来ないでいましたので、私が誘導しましたが、柱を手離すことが出来ないでいる状態であった。上下動が一分位、途中でやむかと思われる揺れが数秒間あり、ようやく軒先の姉が子供と共に外に出ることが出来ました。とにかく水平動が激しく、固定した物につかまらなければ、地上で這ってもころげ出され、立つ事などとうてい出来ませんでした。前後二分内外だと思ったが、誠に長時間に感じた地震であった。

当時、快晴であったため、地上の土煙りなど各所一斉に舞い上り、空が灰色で太陽が満月を見る様に直視出来た。水平動のときには、庭が波の打つ如く見え、地球に異変が生じたと思い呆然としたものでした。地震がやんでようやく家族の確認をしたがその時姉は、台所で昼食の用意をしていて、火を出したため水をかけていたので少し戸外へ出るのが遅れたようでした。兄は近くの水田の出穂状況を見まわり中に地震に出あい、水田にたまった水の流出に押し流され、地割れにはさまれましたが、二度目の地割れの時開いたので稲株につかまりはい出たそうです。それから三〇分位して、家に帰って来てこの様子を語りました。

当時、農村では草葦屋根が多く、外に出る時落下物が少く、人命にかかわるような被害は少なくてすんだが、家の中では主として地震を軽く考えて、外に出るのが遅れ大揺れになって出ようとし、軒先などで圧死した例が多かった。地震が止んでもなお余震が続き、時々震度四、五位のものがあり、二日間位はゴムの上にでもいるようにふわふわした感じであった。どこでも三日位は建物から離れたところに丸太等を並べ畳を敷きこの上に仮小屋を造り過した。それはまだ大地震が起きるかも知れないという恐怖心からであった。三日目の夕刻、雨が降り出し恐る恐る戸締りなど出来ないあけっぱなしの家に入り、ただ生きることだけを考えているような状態であった。余震

は経過するに従い、回数も減り揺れも小さくなって、人々も少しづつ落ちついて来た。

大地震が止んだ直後、秦野町の一角に火災が発生し煙が立ち昇るのを見たが、目前の大災害で出向う気持など起らず、夜に入っても東の空が赤々と明るく夜空に映っていたのを思い出す。東京、横浜などで大火災が発生し、三日ももえ続き、人命など大被害を生じた事を数日後に聞かされた。

当村に電燈の施設がされたのは大正十年頃であったので、電気が止まっても、まだ残っていた「あんどん」で菜種油をともし、一ヶ月位夜を過した。九月下旬と思うが、生活保護家庭に救援の米五俵（六〇キロ入り）を配分するので、大磯の海岸に青年が受領に行く様村役場より要請があり、私もこの一人として、朝六時頃より十名程で道路の破損箇所をさけながら、往復四〇キロ余りの距離を三〇キロづつの白米を肩に負い、夕刻六時頃帰着したがその疲労は今も忘れない。

精米所等は水車が動力源であったため、それが使用不能となり、餅臼で玄米をついたが、十分な精米は出来ずに空腹に入れるような状態であった。日が過ぎるに従って、色々の出来事を知り、倒壊した家屋は地盤の軟かい水田に近い場所や傾斜地等に多かった。平らな畑も波のうねりのごとく巾二メートル位、高低二五センチ位の形状でその跡が残っていた。

九月十四日より十五日にかけ、大地震後初めて大雨が降り、菩提山に異様な轟音が響き、これが十五日午後迄続いていたが、夕刻より夜半に至り山津波が起き、葛葉川沿いの菩提中東の水田の全部が土砂混りの泥土で埋まってしまい、山内部落の三戸が押し流され、跡方もなくなってしまった。これは九月一日の大地震で奥山の数十ヶ所の崩壊で谷間が埋り、それまで相当流れていた水が止まり、山間に大小の溜池を形成していたものが、十四日の大雨で急に増水し欠壊したものでした。

当時を思い起し、震度六、七の大地震では、人の行動は止まり、その瞬間の落ちついた行動が大切であると思った。

現在の住宅は瓦屋根が多く、地震での落下は必至と考える。そしてガラスが多く使用されているので、破損等を考慮し避難する事が肝要と思う。

関東大地震（大正１２年９月１日）
旧町村別被害状況

旧町村名	大正 12 年震災時		住家被害					人的被害			倒壊率 (%)
	人口	戸数	全壊	全焼	半壊	半焼	流出その他	死者	行方不明	負傷者	
秦野町	10,273	2,013	351	232	1,457	5	―	21	1	27	17.44
南秦野村	4,975	728	208	―	285	―	―	24	2	40	28.57
東秦野村	4,756	720	218	1	290	―	14	31	―	17	30.32
北秦野村	3,317	518	141	―	162	―	11	15	1	18	27.22
大根村（大字真田を含む）	3,710	581	348	―	175	―	―	53	6	22	59.90
西秦野村	4,939	807	153	―	62	―	―	18	―	6	18.96
上秦野村	2,027	329	71	―	209	―	―	9	―	5	21.58
合計	33,997	5,696	1,490	233	2,640	5	25	171	10	135	26.16